SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

Vol. 17

進化するプロ・スポーツチームの地域貢献

New Developments in Local Community Contributions by Professional Sports Teams

産業能率大学

SANNO UNIVERSITY

マネジメント理論と実践を柱に
ビジネスプロフェッショナルを育成

産業能率大学は、世の中で実際に役に立つ能力を育成する実学教育を根幹としています。
社会人・職業人としての基本的な能力やビジネスの実務知識とスキルを身につけ、
また、主体性を持つ自立したビジネスパーソンとしての教養を養うため、
「真剣に取り組む力」「実行する力」「深く学ぶ力」に焦点を絞りカリキュラムを設計しています。
また、コンサルティング機関である総合研究所と連携し、
ビジネスの最新情報や最先端の動向を教育に取り入れるべく企業や団体との提携に取り組むなど、
産業界に最も近い大学として学外とのコラボレーションを積極的に進めています。

SANNO SPORTS MANAGEMENT
SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY,JAPAN
Vol. 17

CONTENTS

特集 進化するプロ・スポーツチームの地域貢献

04 研究員紹介

05-08 01 Bell-Being プロジェクト
ー湘南地域の幸福感を高める「あって良かった」クラブへー

09-10 02 横浜 DeNA ベイスターズの地域貢献・地域密着
「地域と未来に貢献するプロ野球」

11-13 03 「CITY の名のもとに」
ー地域の人にプロ・スポーツを楽しんでもらうためにー

RESEARCH REPORTS

14-15 04 TKbj リーグクラブの現在地
～ B リーグの成長の狭間で～

16-17 05 プロ野球ファン心理研究
―心理検査を用いた教育実践―

18-19 06 大学運動部サポートプログラム：
第 8 期リーダーシップ養成プログラムの実施報告

20-21 07 サッカー部 3 年生対象キャリアサポートプログラム
「サッカーと私ーこれまでとこれからー」その2

22-24 08 スポーツ関連データを用いた表計算スキル修得
ー必修科目における興味と理解の促進ー

25-26 09 2024 年度 本学姉妹校 銘傳大学
「スキー・日本文化体験研修」実施報告

27-30 10 SANNO スポーツマネジメントのあゆみ（2004-2024）

研究員紹介 （2024年度に在籍した研究員） Staff

■ 研究所長

中川 直樹

産業能率大学
情報マネジメント学部　教授

■ 研究員

木村 剛

産業能率大学
経営学部　教授

■ 研究員

齊藤 弘通

産業能率大学
経営学部　教授

■ 研究員

小野田 哲弥

産業能率大学
情報マネジメント学部　教授

■ 研究員

椎野 睦

産業能率大学
情報マネジメント学部　教授

■ 研究員

髙瀬 裕也

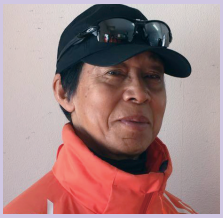
産業能率大学
総務部　秘書課

■ 研究員

駒澤 恵一

産業能率大学
湘南事務部　湘南教務課

■ 客員研究員



行方 剛

行方剛スキークリニック

■ 客員研究員

川合 俊一

日本バレーボール協会　会長
日本ビーチバレーボール連盟 会長
㈱ケイ・ブロス代表

■ 客員研究員

川合 庶

産業能率大学
女子ビーチバレー部 ヘッドコーチ
日本バレーボール協会
ビーチバレーボール本部長
産業能率大学
情報マネジメント学部　兼任教員

■ 客員研究員

西野 努

横浜Ｆ・マリノス
スポーティングダイレクター

■ 客員研究員

水谷 尚人

㈱ガンバ大阪
代表取締役社長

■ 客員研究員

中島 靖弘

NPO法人湘南ベルマーレスポーツ
クラブ トライアスロンチーム
GM

※研究員肩書きは
2025年5月1日現在のものです

01 Bell-Beingプロジェクト

ー湘南地域の幸福感を高める「あって良かった」クラブへー

株式会社 湘南ベルマーレ 事業本部 ブランド＆メディア部
部長　風村 ひかる 氏　　社会連携担当　中里 宏司 氏

@SHONAN BELLMARE

「夢づくり 人づくり」をミッションに掲げ、世代と地域をつなぐ様々な事業を展開している湘南ベルマーレ。そのベルマーレが2025年に新たに打ち出した構想が「Bell-Beingプロジェクト」である。当該構想のバックグラウンドと今後の将来展望について、ブランド＆メディア部にて同プロジェクトに携わる両氏に話をうかがった。

インタビュー・文：　情報マネジメント学部 教授 小野田 哲弥

1. クラブ存続の感謝と「恩返し」

最初に、湘南ベルマーレはなぜそこまで「地域貢献」にこだわるのか、その背景についてお聞かせください。

中里：前身である「ベルマーレ平塚」が存続危機にあった当時（1999年）、私は高校2年生で、クラブの下部組織に所属していました。この先どうなるかわからない不安を抱えながら活動をしている中で、サポーターをはじめとする地域の方々が、このクラブをつなごうと必死に動いてくれているのを間近で見ていました。そしてそのおかげで残ることができた。本当にクラブが消滅するかもしれない時に手を差し伸べてくれた。だからその感謝の気持ちを忘れずにプロに上がってからも活動してきたし、地域に恩返しをしていかなくてはいけないのがこのクラブの使命だと思っています。

地域に根差すことを謳っているJリーグの中でも、とりわけベルマーレにその想いが強い理由について頷けました。

風村：「恩返し」という気持ちがある一方で、今後も存続を続ける、つまりサスティナブルであるためには、ホームタウンを

平塚から湘南地域に広げた、その拡大した市場に、しっかりとマーケティングでアプローチしていかなければならない使命も担っています。結局は、存続しつづけることが一番の恩返しでもあるので。
ただ個人的には、地域の皆さんと一緒にスポーツをして、ともに喜ぶことに意味があると感じるので、サポーターの皆さんとスポーツでも地域活動でも接点を持って、一緒に楽しい時間を共有していく手段であり目的でもあり、重なっているなと思いながら活動しています。

2. スポーツに留まらない多彩な「学び」の提供

実際の地域貢献活動の中身について教えていただけますか？

風村：真っ先に思い浮かぶのは小学校の「体育巡回授業」です。基本的に小学校からの希望制で、自治体と教育委員会から許可も得て行なっています。

巡回授業を希望される小学校側のねらいは？

中里：今はなかなか休み時間も外で遊ばない子が増えているとお聞きしているので、学校としては巡回授業をきっかけに外に出るのが楽しくなってほしいというねらいがあると思います。私もコーチとして指導したことがあるんですけど、ボールを触るのが怖いという子も多いので、まず手でボール触るところからスタートします。話しながら一緒に体を動かして、手からだんだん足に移行していって、最後はサッカーの試合まで45分間で行います。
巡回授業は2000年にスタートして、もう25年になります。この授業を機に運動するのが好きになったという声はよく聞きますし、ベルマーレには総合型スポーツクラブとしていろんな競技があるので、巡回授業でベルマーレを知り、ベルマーレを通して他の競技を知って、現在その競技で活躍している子たちもいます。

子どもたちの運動不足解消やスポーツの楽しさを広めることに効果を発揮しているのですね。ところで、貴社のホームページで「英語でサッカー教室」という活動も目にしました。

風村：実は私自身も幼少期に「ディズニー英語システム」のおかげで外国語に親しむことができたのですが、ワールド・ファミリー（「ディズニー英語システム」の運営会社）様にスポンサーになっていただいていて、サッカーの指導者ライセンスを持っているネイティブのコーチと、ベルマーレのスクールコーチが協働して行なっている教室になります。

サッカーと英語が一緒に学べるなんて画期的ですね。その他に最近始めた事業はありますか？

風村：新しく始めたプロジェクトとしては、「サステナトレセンProject.」略して「サストレ」という、子どものアイディアをもとに、地域のサスティナビリティにコミットしていく活動があります。小学校に訪問し、サステナビリティの講義をした上で、「この地域に住み続けたくなるための○○ってなんだろう？」をテーマに、その課題と解決策に自分の興味があるものを掛け合わせて、自律型でアイディアを出して行く活動です。この活動には、先生だけでなくベルマーレパートナーの大人たちも加わって、「なんでこう思ったの？」とか「この数字の根拠は？」など、かなりしっかりとした指導を入れて、本気で向き合います。
2024年度は茅ヶ崎市と協定を結んで進めました。最終報告会は市のホールで開催して、市の職員やパートナーの大人たちを前に、子どもたちがいきいきとプレゼンを披露しました。その様子はテレビや新聞にも取り上げていただきましたし、子どもたちが提案した施策の中には、実際に実現に向けて検討が進んでいる施策もあります。

地域のニーズに即した様々な地域貢献活動を実施されていることがわかりました。ここ数年取り組んでこられて、全般的な手応えはいかがですか？

風村：手応えの感じ方にもよりますが、今はやればやるだけ手応えはある段階ではあります。それを担当者で完結させるんじゃなく、社内で関わり合いをもって継続できるかが課題ですね。あとは、いかに効率的に進めていけるかも大事だと思います。Bell-Beingでは5つのマテリアリティ（環境、教育、健康、多様性多文化交流、防災）ができたので、優先順位の判断がつくようになりました。
ただ、地域貢献活動全般に言えるのですが、すぐに目に見える成果が出づらく、評価しづらいので、継続するリソース

小学校体育巡回授業（左）と「英語でサッカー教室」（右）の1シーン

「サステナトレセン Project.」の活動風景（左）と最終発表イベントの様子（右）

やモチベーションの維持は課題に感じています。

まだ「社会実験」の段階で、目に見える成功はこれからと？

風村：そうですね。長い目で見て地域の企業に返ってくることを見据えた活動としては、アズビル株式会社様との共催で行なったキャリア育成プログラムの「湘南まなべるまーれ」があります。これは人口流出を抑えて、地場で就職してもらうことを目的としていて、湘南でこれだけ何かに夢中になって楽しそうに働いている大人たちがいるという実像をリアルに見せるキャリア育成プロジェクトでした。

中里：いま湘南ベルマーレのトップチームで活躍している石井久継選手は、中学2年の時に横浜ゴム株式会社様の平塚工場で開かれた回に実際に参加していました。競技とは直接関わりはないかもしれませんが、仕事に取り組む姿勢や考え方には影響や刺激を受けているかもしれません。

風村：このプログラムには、サッカーに関心がない子どもたちも多く参加してくれました。湘南ベルマーレというスポーツクラブを通して、地域で仕事を全力で楽しんでいる企業、大人と繋がっていける環境を作れたことは大きな成果だと感じています。

3.「日常」に溶け込むベルマーレ。花咲く未来を信じて種をまく

さいごに、理想とされる将来像についてお聞かせください。

風村：理想像としては、週末に飲食店で食事中の人が「ベルマーレ勝ったんだって。じゃあもう一杯飲むか！」みたいな世界観がいいなと思います。そうすると経済も回りますし、知らない人だけど乾杯して親交が生まれる、そのきっかけにベルマーレがあった、という存在になれたら、人を繋いで地域を豊かにすることができるのではないかと思っています。その一方で、どんなに強いクラブでも全ての試合に勝てるわけではないので、試合に勝つことだけに賭けるのは持続性がないというふうにも思うんです。そこをアイデンティティにしてしまうと、例えば負けた時に「なんだよ、もう来るもんか」となってしまうので。私は2024年のはじめまでずっとフードパークを担当していました。そこで目指していたのは、たとえ試合に勝てなくても「なんかご飯美味しかったね」「また来てもいっか」と、週末の楽しみとして捉えてもらうことでした。

湘南ベルマーレのスタグル（スタジアムグルメ）がいつも大勢のお客さんで賑わっているのは、そうした理想に向けた取り組みの賜物だったのですね。中里様はいかがですか？

U-20 日本代表の石井久継選手（左）は「湘南まなべるまーれ」の参加経験者（右写真の下段中央）

中里：実は私は担当になってまだ一年ちょっとなんですね。手応えっていうのは正直全然ないんですけど、地域貢献活動をすることで、世の中が変わっていき、それにベルマーレが少しでも関わっているっていうのが、なんかいいなと。そういう風に自分が変化してきてるっていうのは、自分自身の手応えというか感覚としてある気がします。それをもっともっと感じるようになった時に、周りをもっと巻き込んで行けるといいのかなぁと思っています。

担当になられて、中里様ご自身のWell-Being（幸福感）もアップしたということですね。「実践」によってはじめてその意義が実感できる活動だということも理解できました。

中里：将来的には地域の中で、日常会話に出てくるような存在になりたいですね。サッカーにそこまで興味はないけど、「ベルマーレどうだった？」とかって、上の世代でも下の世代でも。NPO法人湘南ベルマーレスポーツクラブはそこに力を入れていて、ご高齢の方向けの健康づくり教室もやっているんですね。今のところ「ベルマーレ」って聞いたら、サッカーを想起する方がほとんどだと思いますが、「今日ベルマーレ行く」っていうのが、実は試合じゃなくて健康づくり教室だったり、そういう形でベルマーレの輪が広がっていくといいですね。
ベルマーレがいてくれたからこそ参加しやすかったとか、こんなこと解決できたとか、「ベルマーレがあって良かったな」みたいに思ってもらえるのが一番かな。そうじゃないとクラブがある意味というか、最初に話したような地域の方々に助けていただいた意味がないので。目先の結果ももちろんですけど、本当に地道な種まきが、さっきの巡回もそうですが、芽が育って、のちのち花開いていくというか、それをするための活動なのかなっていうのを感じています。

湘南の味覚と SNS 映えを兼ね備えたスタジアムグルメは
「J リーグ No.1」との呼び声も高い

本日は貴重なお話をありがとうございました。私自身、2025年度に新設科目の『湘南ベルマーレ コラボレーション プロジェクト』を担当させていただく上でも、非常に参考になるポイントを数多くうかがうことができました。着実に実績を積み上げてこられた貴社と協働し、一緒に地域を盛り上げられるよう本学も努めてまいります。

株式会社 湘南ベルマーレ
事業本部 ブランド&メディア部 部長

風村 ひかる（かざむら・ひかる）

1993年　神奈川県藤沢市生まれ
同市内の湘南高校ならびに慶應義塾大学総合政策学部を卒業。在学中にサッカーの本場ドイツにも留学。2016年、新卒で株式会社湘南ベルマーレ入社。
toC事業部飲食担当マネージャーとして手掛けた「フードバーク」が、サッカー専門紙『エル・ゴラッソ』の調査でスタグル充実度1位を獲得（2019）。2024年より現職。

株式会社 湘南ベルマーレ
事業本部 ブランド&メディア部 社会連携担当

中里 宏司（なかざと・こうじ）

1982年　神奈川県鎌倉市生まれ
ベルマーレ平塚ジュニアユース、ユースを経て高校3年時にJリーグデビュー。U-20、U-21、U-22の世代別日本代表にも選出。2008年に現役を引退し、株式会社湘南ベルマーレ入社。フットボールアカデミー普及部を経て、茅ヶ崎フットサルクラブ支配人、柳島スポーツ公園所長を歴任。2021年にPR部広報副担当、2024年より現職。

02

横浜DeNAベイスターズの地域貢献・地域密着
地域と未来に貢献するプロ野球

株式会社横浜DeNAベイスターズ 野球未来創造室
野球普及・振興部地域コミュニティーグループ
浦田 晃仁（Akihito Urata）氏

2024年に日本一に輝いた横浜DeNAベイスターズ。そのベイスターズは「Bみらいアクション（やきゅうみらいアクション・まなびみらいアクション・ちいきみらいアクション）」をはじめ、地域と野球の未来を見据えた様々な活動にも力をいれている。今回は野球未来創造室の浦田さんにインタビューした。

インタビュー・文：情報マネジメント学部 教授 椎野 睦

浦田さんは、現在、どのような部署でどのようなお仕事をされているのでしょか？

野球未来創造室 野球・普及振興部で野球を広げていく活動はもちろん、教育の場においてもキャリア教育などでベイスターズとの接点を作ったり、地域の祭りに参加してベイスターズを身近に感じてもらうような仕事をしています。昨年は日本一になったこともあり、優勝パレードの実施も我々の部を中心に実施しました。

地域の方々とお仕事をしていて嬉しかったことや苦労されたことを教えてください。

野球やベイスターズに興味の無かった子どもや地域の皆さまが我々のイベントや訪問活動を通して楽しんでくれる姿、そして幼稚園・保育園・小学校からはお手紙や絵を頂くことがあるのですが、チームの応援はもちろんですが、「野球が好きになった」「観に行きたい」などのメッセージを頂くのはとても励みになります。

また、昨年優勝パレードを実施して30万人もの人が集まってもらった光景は今でも忘れられないです。もちろんそれを実現するまでに自治体の皆さまに我々の活動をご理解いただき、ご協力いただくまでには苦労も多かったです。

昨年のイベントユニフォームは、胸元が「Yokohama」ではなく「Kanagawa」になっていましたが、そこに込められた想いや意図としては、どのようなものがあったのでしょうか？

昨年（2024年）は神奈川に移転して70年目という節目の年であり、改めてここまでベイスターズを応援、支えてくださった神奈川の皆様への感謝をお伝えするとともにもっと愛される球団を目指すためにこれからも共に歩んでいくということをメッセージに込めておりました。

「横浜」DeNAベイスターズという球団名ですので、どうしても横浜のチームという印象が強いですが、我々は神奈川のチームであるということを再度県民の皆様に認識頂きたいという想いも込めております。

横浜DeNAベイスターズは、「地域貢献」「地域密着」という視点から、今までどのような取り組みをされてきたのでしょうか？

幼稚園・保育園、小学校の訪問活動は年間それぞれ100回ずつ実施して、地域の皆さまにより近い存在として感じてもらう施策はずっと続けております。

さらにはB-PARKというイベントを2023年より展開しておりますが、こちらは神奈川県内各地域で野球に触れてもらう、地域のイベントとして取り組んでもらうことを目的に実施しております。

また、小学校からキャリア教育というご要望もいただき、その教育活動にも力を入れています。具体的には「プロ野球選手の仕事」とは別に「プロ野球球団で働く人達（クルー）の仕事」を学ぶ機会を設けてほしいという依頼でした。そのキャリア教育も2023年度から実施しています。今朝も1,500人の小学校（5年生）を対象に授業を行いました。今日と明日で4,000人を対象に授業を行う予定です。昨年（2023年）はそのような活動を4回ぐらいやったので約15,000人の小学生を対象に実施しました。そして、授業を受けた子どもたちをオープン戦に招待して実際に球場で働いているクルーを見てもらうということも行いました。

授業を受けた小学生からはどのような質問が多いですか？

「なんでベイスターズに入社したのか？」「仕事のやりがいは？」といった質問が多いです。返答としては「自分も野球をやってきたので、野球に恩返しがしたい。野球文化を未来に残していきたい。」という想いを大切にしていることを伝えています。

なぜそのような想いを持たれるようになったのでしょうか？

私はもともと高校まで野球をやっていました。当時、地元関西の強豪校と対戦したときに大きな実力の差を見せつけられるシーンがありました。そのとき「食っていけない（プロになれない）」と感じました。ですが、そこからどうやったら野球に関われるかを考え始めました。そこでスポーツ・メディアを学べる大学に進学し、卒業研究ではプロ野球団のビジネスについて研究しました。大学卒業後、当時はプロ野球団への就職というのが一般的ではない時代だったので、他の会社に就職して半導体の営業を担当していました。とてもやりがいを感じていたのですが、自分の中である程度やり切ったと感じたときに「何か新しいことに挑戦したい」と思うようになりました。そのとき、プロ野球選手が当時の子どもたちのなりたい職業ランキングから外れていたことを知りました。プロ野球選手があこがれの職業じゃないんだと知った時は衝撃を受けました。そこで志が芽生えたのを覚えています。そして、2013年にベイスターズに転職しました。

「野球への恩返し/野球文化を未来につなげる」ということで、他にはどのようなことをしていますか？

わたし個人の話になりますが、プロボノでアフリカ（タンザニアなどアフリカ諸国8ヵ国）の子どもたちに野球を教えるプロジェクトに参画しています。きっかけは新型コロナウィルスでした。2019年に球場演出の担当部署に異動となりました。やる気に満ちて様々な演出を用意していたのですが、その矢先にコロナ禍に突入しました。開幕延期・無観客試合・各種の制限、球場演出の仕事は激減し計画していたものはほぼ全て中止となりました。ですがそれはもう一度自分をみつめ直すタイミングとなりました。このような野球の危機において「自分ができることは何か」と考えたときに「日本の野球文化を世界に広げたい」という結論に至りました。そして、アフリカの野球振興にも力を注ぐようになりました。まだまだ課題は多く大変ですが、現地の子どもたち見ていると「めちゃくちゃキラキラした目で野球やっている」「自分も昔はこういう気持ちでやってたなぁ」と、自分が忘れていたものを思い出すことが多かったです。

将来「アフリカがこうなっていたらいいな」という考えはありますか？

もちろんプロ野球選手になるという夢をもってもらえたら嬉しいですが、でもプロになれるのはごく一部です。プロにあこがれ、プロを目指すのと同時に、プロの選手になれなくても「野球を通じて人が育つ」ということを大切にしてもらいたいです。「野球を通じて学んだことを大切にし、色々なところで活躍する人が沢山育ってほしい」という社会を目指しています。

今後、横浜を中心に神奈川県の様々な地域と、どのような未来を築いていきたいと考えていますか？

まずは「ベイスターズがあって良かった」と思われる存在になりたいです。日々の生活の中でベイスターズが人生の楽しみの一つとなってくれる存在になりたいですし、もう少し大きな単位でベイスターズがあったから街が活性化した、人が育ったなどと言ってもらえる未来を築いていきたいです。

最後に読者の皆様にメッセージをお願いします。

昨年の神奈川移転70年目を迎えてより多くの自治体の皆さまや教育関係者の皆さまとお話しさせていただき反省した部分でもあるのですが、もっとベイスターズを身近に感じてもらえるような存在にならないといけないということを感じました。

ただ、我々で実現できることも限界があるので、野球関係者はもちろん他のスポーツ関係者も一緒に神奈川という街を盛り上げて行きたいのでぜひ仲間となってください！

（取材協力：情報マネジメント学部4年 横田恵周・佐々木優奈）

03 「CITYの名のもとに」
ー地域の人にプロ・スポーツを楽しんでもらうためにー

株式会社 日本理化工業所 社長　**大栗 崇司 氏**

1983 年生まれ　地元である品川と栃木でスポーツ・ビジネスを展開

現在、「CITY」という名をつけて活動している複数のスポーツクラブがある。Bリーグ（B3）の「しながわシティバスケットボールクラブ」、2025シーズンからJリーグ（J3）で活動することになった「栃木シティフットボールクラブ」、2024/25シーズン全日本フットサル選手権大会で優勝した「しながわシティフットサルクラブ」がそれである。まだ歴史の浅いこれらのクラブは、1人の経営者の理想のもとに展開されている。複数の地域での多種多様なスポーツの展開。なぜこうした活動を展開しているのか、その中心人物である大栗崇司代表にお話をうかがった。

インタビュー・文：経営学部 教授 木村 剛

1. スポーツ・ビジネスとの関わり

木村：まず、これまでスポーツ・ビジネスに関わってきた経緯について伺いたいのですが。

大栗：私はオハイオ州立大学に留学していたのですが、そこではキャンパス内に10万人収容できるスタジアムがありました。アメフトをはじめとするカレッジスポーツを目の当たりにしたこともあって、スポーツ・ビジネスに元々興味はありました。実際の関わりは、日本に戻ってきて、品川区にある家業の会社に入り2012年に社長に就任しましたが、そこからということになります。

木村：具体的にはサッカーから始められたのですよね。

大栗：そうです。栃木ウーヴァフットボールクラブ（現在の栃木シティフットボールクラブ）です。弊社の創業者が栃木県の出身で、現在も工場があって地下資源を使わせて頂いていることもあり、何か地域に恩返しができないかと考えているところに、経営で苦しんでいた地元のサッカークラブがあり、こちらからお声がけさせて頂きました。サッカーは上が目指せるのでやりが

いはあると考えていて、来期ようやくJ3に参入することになりました。

木村：次にバスケットにも参入されましたね。

大栗：順番から言うとフットサルが先です。こちらは品川区の地場の経営者の皆さんとのお話しの中から「品川区にプロスポーツクラブを持って来て欲しい」という話がありました。スポーツこそ違いますが、栃木でサッカーチームを運営していたことで多少のノウハウはありましたから、まずフットサルのチームを柏から品川に移しました。それと前後してバスケットの「東京サンレーヴス」がコロナ禍で次シーズンより活動を休止するというお話があったので、サンレーヴスさんにお声をかけさせていただき、バスケットにも参入することになりました。

木村：サッカーと違って、当時はまだBリーグが始まったばかりで、バスケットボールはまだ先行きが不透明なところもあったと思うのですが。

大栗：そうですね。でも都内なので、アリーナスポーツという意味では需要があるかなと考えていました。天候に左右されないですし、品川でサッカーということになるとスタジアム建設はハードルが高いですが、アリーナなら可能性はあるかなと。ただ、アリーナといっても品川の場合、ウチが単体ではできないですし、アリーナという「箱」が出来ても、そこにいらっしゃるお客様の思い入れが生まれないと意味がないと考えています。そこは運営側がうまくブランディングなりを考えていかないと、結局地域の為にはならないと思います。

Bリーグ（B3）で活動するしながわシティバスケットボールクラブ

2.『B革新』と「しながわ」へのこだわり

木村：「しながわ」という都心にあることで、アリーナの建設はハードルが高そうですし、人口こそ多いものの観客の思い入れという面でも、難しい土地柄だと思います。そもそも「東京」ではなく「しながわ」という名称を使われていますが、そこには何かこだわりがあるのでしょうか。

大栗：そうですね、地方と比べても都会はエンタテインメントがたくさんありますし、スポーツだけで人を引き付けるのは難しいと思います。でも「しながわ」にはこだわりがあって、区民数からすればかなり多いので、（地域名が）『東京』等の広域を対象としているよりは品川に絞った方が良いと考えています。

木村：バスケットは一昨年辺りからワールドカップやオリンピックへの出場、NBAで活躍する選手が出てきたこともあって、これまでには無い盛り上がりを見せています。それを受けて、Bリーグも2026年シーズンからの「B革新」を打ち出しています。これはクラブ側からすると高いハードルだと思いますが、今後の展開についてはどのようにお考えですか。

大栗：「B革新」については賛成です。、やはり集客のところも、「B革新」で求められる有料観客数で毎試合興行をしていかないと、新リーグのレベルにはいれないという話なのだろうと思います。努力しないといずれ淘汰されるわけなので、こちら側としては厳しい条件ですが、「B革新」があってもなくても同じだという意味では、いいレギュレーションではないかなと考えています。「しながわシティ」としては、近未来的には、まず「B.LEAGUE　ONE」を目指しており、その後「B PREMIER」 を目指しております。

3.　スポーツを通じた地域貢献について

木村：次に今回の主テーマでもある地域貢献についてお伺いしたいのですが。

大栗：我々の一番の目的は「子供たちに夢と希望を与える」ことにあります。「やるスポーツ」と「見るスポーツ」がありますが、「やるスポーツ」はプロの姿をみてプレーに取り組んで頂ければよいと思いますし、「見るスポーツ」の役割というのが別にあると考えています。よく言われる「非日常」の演出を感じてほしい。小学生の頃にスタジアムやアリーナに行って、それを最初に体験してくれる。どの世代にもそういった経験があると思うんです。東京ドームでも横浜スタジアムでも、規模の大きい小さいはあると思いますが、そこで我々が感じた『感動』を今の子供たちにどうやって与えられるか。それを実現する為に、地域との連携が必要ですし、そのためにパートナーさんにもご協力頂きたいと考えています。

木村：具体的な地域連携の取り組みについて教えて頂けますか。

大栗：栃木シティのサッカーではすでに色々やらせてもらっていますが、「しながわ」ですと、品川区と事業連携というかたちで、フットサルとバスケットで小学校に行かせて頂いて教室を開いたりしています。選手達も積極的にやってくれています。やはり、背が高くて、自分の倍くらいある大きな選手と触れ合うだけで、子供たちにとっては忘れられない体験になると思います。

品川区の小学校での地域貢献活動

木村：「しながわ」で活動していく中で、ビジネスや地域貢献を進めていくうえで困難に感じている点はありますか。

大栗：栃木シティのスタジアムでは「CITY FOOTBALL STATION」と呼んでいる自前のスタジアムがあるのでまだ良いのですが、「しながわ」にはまだホームアリーナの環境が無いので、色々制限があるのが苦しいところです。拠点がないとどうしても限界があります。今は、その与えられた環境の中でどう満員率を上げていくのかということを考えています。他のスポーツもそうですが、バスケットボールは初回の来場ハードルが高いですが、一度楽しいと思ってくれると来てもらえます。「しながわ」のリピーターをいかに増やしていくかが課題です。

木村：サッカーとフットサル、そしてバスケットと現状では3つのスポーツを展開されているわけですが、これらのスポーツを同時に展開することで何かシナジー効果みたいなものは感じていらっしゃいますか。

大栗：選手編成面ではシナジーは難しいのですが、トレーナー同士はつながっているので、トレーナーチームでの情報共有はあります。あとは試合運営のところはお互いに協力していけるのでそこでのシナジーはあります。また運営での協力だけではなくて、「運営をどう管理していくか」といった点はあるかなと思います。その意味では、まだ「しながわ」が栃木に学んでいる感じなのですが、補い合いつつ進めていければと思います。また、グッズは「CITY」という名称のもとに取り組んでいるので、デザインやブランディングでもさらに活用していきたいと考えています。

SHINAGAWA CITY

CITY の名が入ったしながわシティのエンブレム

4. スポーツ・ビジネスを通じて伝えたいことと今後の課題

木村：スポーツ・ビジネスということでいえば、現在この3つのほかにも、サッカーとフットサルの専門学校も設立されていますね。

大栗：「CITY FOOTBALL ACADEMY（シティ フットボールアカデミー）」という、プロサッカークラブである「栃木シティ・フットボールクラブ」とフットサルクラブ「しながわシティ・フットサルクラブ」と連携した、栃木県から認可を得たサッカー専門学校です。
これからのサッカー・フットサル業界を牽引する選手の育成やクラブ運営等に係るスキルや専門知識を習得するとともに、経営的視点からフットボールビジネスに関するノウハウを身につけた人材やチームや選手が最高の状態でプレーできる様々なサポートをする専門知識を習得した人材を育成することを目的としています。

木村：現在、最も課題としていることは何でしょうか。

大栗：課題はやはり「しながわ」の場合は、アリーナの問題が一番です。あとは練習環境ですね。ただそれぞれのスポーツの周辺で、スポーツ・ビジネス周りのビジネスを地域の人達と一緒に創りながら、地域の人にもメリットがあってスポンサードしてもらえるような形を作っていかないと（ビジネスとして）回っていかないかなと思います。スポーツ・ビジネス単体では難しいので、その周辺を考えていく。例えば、栃木周りでいえば飲食ビジネスを運営したり、学校運営、またフルーツパークを運営したり、ということもあり、クラブをハブとした経済効果が生まれます。そうした動きを今後は「しながわ」でもやっていく必要があるかなと考えています。

木村：最後に、スポーツ・ビジネスをやってきてよかったと思うことを教えて頂けますか。

大栗：地域の皆さんが話題にしてくれることが増えたと思います。「昨日負けちゃったね」とか「勝って良かったね」とか言ってもらえる。生活の一部として、自分が住んでいるその地域に、地元にプロ・スポーツのクラブがあるということを感じてくれていれば、うれしいです。先ほども言いましたが、協賛をお願いするスポンサーではなくて、一緒に何かをやっていく、課題を解決するような形にもっていかないと長続きしないと思います。まだまだ育成途上ですが、地域の人達から求められるスポーツチームを作っていきたいと考えています。

（後記）大栗社長は、この後も雑談を含めて色々なお話をしてくれましたが、スポーツ・ビジネスに対する並々ならぬ熱意を感じました。ご多忙のところ、インタビューに快くご協力頂いた大栗崇司社長に感謝申し上げます。

04 TKbjリーグクラブの現在地
～Bリーグの成長の狭間で～

経営学部 教授　木村 剛

1. TKbjリーグとは

『TKbjリーグ』（以下bjリーグ）とは2005年に誕生した日本初のバスケットボールのプロ・リーグである。Bリーグに統合されるまで約10年間独自の活動を行ってきた。Bリーグが2016年に誕生して、早いもので9シーズン目を数えるが、Bリーグが誕生する以前は『TKbjリーグ』と『NBL』という2つの国内リーグが存在し、それを統合する形でBリーグが誕生した。経緯としては1国1リーグが望ましいとするFIBA（国際バスケットボール連盟）から再三の通達を受け、日本代表の国際試合への資格停止処分など、紆余曲折を経て誕生したのが現在のBリーグである。今でこそ、一定の認知を勝ち得たBリーグであるが、満を持しての誕生でなかった。

日本では1967年に実業団リーグが誕生して以来、日本のトップリーグとして活動してきた。その後、1992年のバルセロナ・オリンピックの米ドリームチームの結成や、他スポーツでのプロ化の波を受けて、バスケットボールでもプロ化が俎上にあがり、2001年に「JBLスーパーリーグ」というトップリーグが誕生する。しかし、このリーグでは一部のプロ選手は誕生したものの、完全なプロ化は実現できなかったことから、完全なプロ―リーグを目指し、2005年に誕生したのが「bjリーグ」である。bjリーグの運営母体は「株式会社日本プロバスケットボールリーグ」という、「JBLスーパーリーグ」とは別の団体になり、ここから日本のバスケットボールのトップリーグは2つに分裂することになった。

その後、「JBLスーパーリーグ」側も2007年に「日本バスケットボールリーグ（JBL）」（運営：バスケットボール日本リーグ機構）をスタートさせ、プロ化を推進したものの、一部企業がチームのプロ化に難色を示したことで結局プロ化は実現出来ず、実業団チームとプロチームが混在するセミプロリーグにとどまることになった。その後FIBAからの更なる通達を受け、日本バスケットボール協会（JBA）が主導して2010年からbjリーグ、JBLとの3者で統合新トップリーグ発足に向けて協議を開始し、2013年にNBLが誕生した。しかしながら、bjリーグからNBLに転籍したのは僅か1チーム（現千葉ジェッツ）のみで、統合は再度失敗し、Bリーグの誕生まで分裂は続くことになる。

2. bjリーグの特徴

とまれ、今回テーマにしたいのはこのbjリーグに所属していたクラブが現在どうなっているかという点にある。bjリーグは、設立当初から主に以下のような特徴を持っていた。「プロ・リーグとして全試合自主興行であること」「エンターテインメントとの融合を図ること」「地域密着を明確にし、チーム名から企業名を排除すること」である。bjリーグの理念について、詳しくは「bjリーグ3つの理念」「bjリーグ7つのビジョン」で検索されたい。

このbjリーグの特質を見ると、現在のBリーグにもそれが受け継がれていることが分かる。実業団リーグとの確執はあったものの、bjリーグ自体は「地域密着」のコンセプトが功を奏したのか一定の盛り上がりを見せた。その証左として、2005年に6チームでスタートしたbjリーグは、最終年となる2015-16シーズンには24チームへと拡大し、優勝決定戦では有明アリーナを満員にできるほどの盛況をみせた。チーム数が増えたのには大きな理由がある。それは新規参入障壁の低さである。bjリーグに加盟し、地元でプロ・バスケットボールチームを運営していくためには、当時、年間約3億円あれば可能だったようで、これはサッカーなどに比べて格段に安い。当初のエントリーフィーは2000万円でよく、2000人収容できるアリーナを確保し、ホームゲームが20試合開催できれば参入可能であった。2000人収容規模の体育館は全国に比較的多くあり、地方自治体も県立体育館レベルの設備で協力することで、チームに協力できることも魅力的であった。その結果、全国に24ものチームが誕生したことは、このビジネスシステムの成果といってよい。そして、いくつかのチームは地元に愛され、地域に欠かすことの出来ない存在になっていったことは紛れもない事実である。

しかし、この参入障壁の低さが逆にBリーグ発足時に大きな障壁となった。Bリーグ（B1）に入るためには「入場可能者数5000人のホームアリーナを準備できること」、「年間80%のホームゲームを実施できる会場を確保すること」等の条件のほか、財務状況についても厳しい審査があり、それをクリアできないbjリーグのチームが数多く出てくることになったのである。2026シーズンに始まる「B.LEAGUE PREMIER」を頂点とする新リーグではこの審査基準はさらに厳しいものとなっている。

3. 旧bjリーグクラブの現状

ではbjリーグに参加していた各チームが、厳しいBリーグの審査基準を経て、現在はどうなっているのかについてみてみよう。以下の考察は、bjリーグ最終年に参加していた24チームを対象としており、かつてbjリーグに所属しNBLに参加していた千葉ジェッツなどは含めていない。

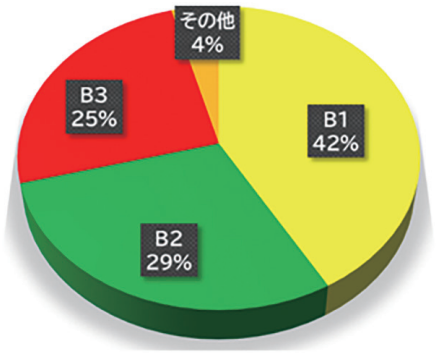
図1は、bjリーグ最終年に加盟していたクラブを挙げ、わかる範囲で現状について記述したものである。全国に満遍なくチームが存在していることが分かる。またホームアリーナは、アリーナとは名ばかりで○○体育館という名称が目立つのも特徴

図１：旧 bj リーグ・チームの現状

地区	かつてbjリーグに所属していたチーム（bj最終年）	2024-25シーズン現在	備考	都道府県	ホームアリーナ（当時）	参入年
東	青森ワッツ	B2		青森県		2013年
	岩手ビッグブルズ	B3		岩手県	岩手県営体育館	2011年
	秋田ノーザンハピネッツ	B1		秋田県	秋田県立体育館	2010年
	仙台89ERS	B1		宮城県	ゼビオアリーナ仙台	2005年
	福島ファイヤーボンズ	B2		福島県	郡山総合体育館	2014年
	新潟アルビレックスBB	B3		新潟県	新潟市東総合SC	2005年
	富山グラウジーズ	B2		富山県	富山県総合体育C	2006年
	信州ブレイブウォリアーズ	B2		長野県	千曲市戸倉体育館	2011年
	群馬クレインサンダーズ	B1		群馬県	ヤマダグリーンD前橋	2012年
	埼玉ブロンコス	B3		埼玉県	所沢市民体育館	2005年
	東京サンレーヴス	B3	しながわシティが継承	東京都	大田区総合体育館	2012年
	横浜ビー・コルセアーズ	B1		神奈川県	横浜国際プール	2011年
西	金沢武士団	B3		石川県	金沢市総合体育館	2015年
	浜松・東三河フェニックス	B1		静岡県	浜松アリーナ	2008年
	滋賀レイクスターズ	B1	現 滋賀レイクス	滋賀県	滋賀県立体育館	2008年
	京都ハンナリーズ	B1		京都府	ハンナリーズアリーナ	2009年
	大阪エベッサ	B1		大阪府	住吉スポーツセンター	2005年
	バンビシャス奈良	B2		奈良県	橿原公苑第一体育館	2013年
	島根スサノオマジック	B1		島根県	松江市総合体育館	2010年
	広島ライトニング	活動休止		広島県	広島市安佐南区スポーツセンター	2015年
	高松ファイブアローズ	B3	現 香川ファイブアローズ	香川県	高松市総合体育館	2006年
	ライジング福岡	B2		福岡県	アクシオン福岡	2007年
	大分・愛媛ヒートデビルズ	B2	愛媛オレンジバイキングスに継承	愛媛県	ビーコンプラザ	2005年
	琉球ゴールデンキングス	B1		沖縄県	沖縄CC	2007年
	東京アパッチ	脱退		東京都	代々木第二体育館	2005年
	千葉ジェッツ	B1	NBLに参加後Bリーグへ	千葉県	船橋アリーナ	2011年
	宮崎シャイニングサンズ	脱退		宮崎県	宮崎県体育館	2010年

（筆者作成）

図２：bj リーグ・チームの現状



（筆者作成）

的である。次に、図2は現在のBリーグ（2024-25シーズン）で、B1、B2、B3のどのカテゴリーに区分されているのかを示したものである。旧bjリーグの24チーム中、B1所属が10チーム（42%）B2所属が７チーム（29%）、B３所属が６チーム（25%）、その他が1チームとなっている。トップカテゴリーのB1が最も多いが、言い換えれば、全体の54%のチームはB1には入れなかったことになる。もちろん各チームによって事情は異なるがbjリーグのほとんどのチームがBリーグに参入を希望したものの、財務や売上高基準、資金繰り基準などの条件をクリアできず、希望したカテゴリーでの参入が叶わなかったチームは多かったということだ。とりわけアリーナの整備（Bリーグ、B1では5000人収容のアリーナが条件）は一朝一夕でできるわけではなく、ここで各チームの差が大きく出てくることになる。新アリーナの問題は、Bリーグの各チームにとっては大きな課題であるが、逆にこの課題をクリアすると、トップカテゴリーで戦える可能性は高まる。実際に、新アリーナを建設しバスケットボール熱の高まりを受けて盛況を続けているチームも増えてきた。ひと昔前では考えられないことだが、人気チームでは連日ほぼ満員という状況で、観客数は安定している。

そこで考えなければならないのは、新アリーナの建設が難しく経営面で大きな変革が望めないチームは、チームとしての目標・目的をどこに定めるかということにある。2026年に始まる「新Bリーグ」では、現在のところトップカテゴリーの「B.LEAGUE PREMIER」は18チームで始まることになっているが、その後は参加チームの上限を設けない「エクスパンション（チーム数拡大）型」のリーグを目指す予定となっている。日本という限られた市場の中で、大規模アリーナの数を含め、どのくらいのトップカテゴリーのチーム数が適正なのかは不明である。成績での昇降が無い以上、全てのチームがトップカテゴリーを目指す必要はないし、現実問題としてそれはかなり難しい。米NBAのように、トップリーグの傘下による下部リーグが組織されるやり方も有るかもしれないが、このBリーグのビジネスモデルで下位カテゴリーに所属するチームがどこにアイデンティティを確立するかは今後大きな課題となろう。

05 プロ野球ファン心理研究
―心理検査を用いた教育実践―

産業能率大学 教授　椎野 睦

産業能率大学情報マネジメント学部には「スポーツ・プロモーション」という横浜 DeNA ベイスターズとのコラボレーション授業がある。その授業では「産業能率大学スペシャルゲーム」と題したプロ野球イースタン・リーグ公式戦 1 試合を学生自らの手でマネジメントする。そこで 2024 年の産業能率大学スペシャルゲームでは、心理検査を活用したイベントブースの運営を通じて実践研究を行った。具体的には、ファン心理の分析を行うと共に、コミュニケーション能力の向上や人間理解の深化を目的とし、学生による心理検査（持続的幸福と人生満足度の測定）とフィードバックとしてのカウンセリングを実践した。本稿では、その実践研究の取り組みと結果を報告する。

1. 経緯と背景

2024年7月6日に平塚球場（バッティングパレス相石スタジアムひらつか）では「産業能率大学スペシャルゲーム2024（横浜DeNAベイスターズ vs 千葉ロッテマリーンズ：イースタン・リーグ公式戦）」が開催された。本研究はこの産業能率大学スペシャルゲーム開催中のスタジアム内に「メンタルブース」と題したイベントブースを出展し、そこで実施した。メンタルブースでは、トレーニングを受けた学生が来場者の幸福感と人生満足度を測定し、そのフィードバックカウンセリングを実施した。

近年、WHO（World Health Organization）の提唱をはじめ、世界中で「well-being」の重要性が高まっている。WHOはwell-beingを「健康」と定義し、具体的には「健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが 満たされた状態にあること」としている。日本の厚生労働省は「厚生労働省は「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念」としている。

そこで本研究では、幸福感と人生満足度を測定し、フィードバックカウンセリングを実施する実践を通じて、スポーツイベントのマネジメントという教育実践を実施すると共に、プロ野球ファンのwell-beingについて考察し、そのマネジメントにスポーツが貢献することの可能性について検討した。またメンタルブースは、心理的な幸福感を測定するイベントであること、そしてベイスターズのチームカラーが「青」であることから、「幸せの青い鳥」というキャッチコピーで運営された（写真1～4を参照）。

2. 幸福感の測定

本研究ではSeligman（2011）が提唱したwell-beingに寄与するとされている「持続的幸福感（flourish）」に注目した。持続的幸福感とは、一時的な幸せではなく持続することが可能な幸福感のことを意味する。そしてSeligmanは持続的幸福感を得るためには「Positive Emotion（喜び、良い気分、快楽など）」「Engagement（夢中、熱中、没頭など）」「Relationship（良い人間関係、絆、感謝など）」「Mean（人生の意味や価値、志、使命など）」「Accomplishment（達成感、成長、成功など）」の５つの心理的要素が満たされていることが重要であるとしている。それは各要素のイニシャルから「PERMAモデル」と称され、Seligmanは2051年までに世界中の51%以上の人が持続的な幸福感を感じることができる社会を実現することを目指した

写真 1．実施風景①

写真 2．実施風景②

写真3．実施風景③

写真4．実施風景④

「PERMA51」という運動を展開している。

そこで本研究では、来場された方の持続的幸福感の各要素（PERMA）が0～100%のうち現在何%満たされているかを尋ね、その理由も尋ねた。

またDienerが作成し、角野（1994）により日本語版が作成された「人生満足度尺度（SWLS：Satisfaction With Life Scale）」も用いて心理的な幸福度の測定を行った。SWLSは5項目7件法の心理検査であり、比較的簡単に人生の満足度を測定できる心理尺度である。

また小学生以下の来場者にはSWLSは実施せず、PERMAの各概念を平易な言葉でわかりやすく説明し、それぞれの要素が5点満点で何点であるかを尋ね、その理由も尋ねた。

3. 結果

本ブースにて測定に参加してくれた人（被験者）は144名であった。その年齢および性別は図1の通りであった（取得したデータに欠損があった4件は除く）。また子ども被験者（小学生以下）は30名（男子27名、女子3名）であり、平均年齢は9.03歳であった。

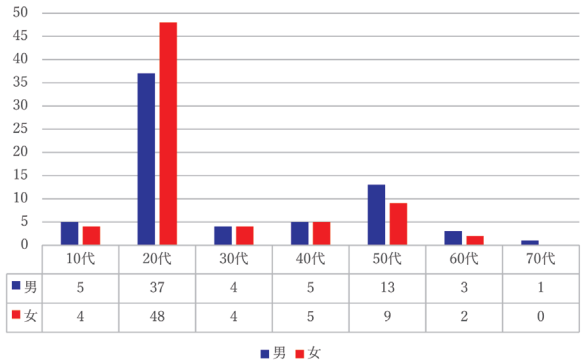


図1．被験者の年代と性別（表内数字は人数）

続いて、子ども被験者のPERMA得点は図2の通りであった。

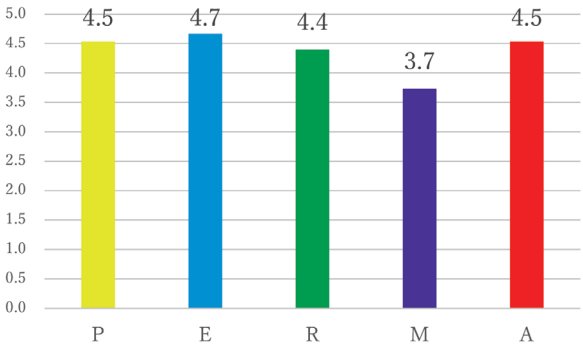


図2．子ども被験者（小学生未満）の PERMA 得点（5 点満点）

また、被験者（中学生以上）のPERMA得点および人生満足度との相関係数は図3・表1の通りであった。

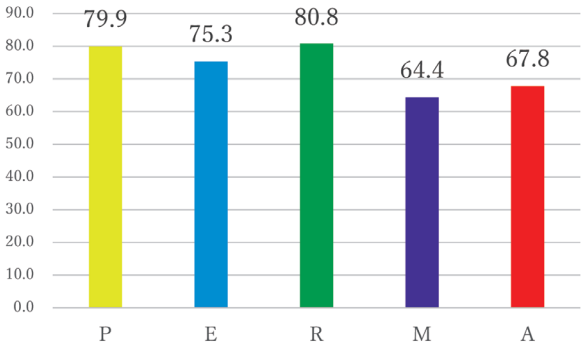


図3．被験者の PERMA 得点（100 点満点）

表 1．人生満足度と PERMA 得点の相関係数

	P	E	R	M	A
人生満足度	0.481	0.323	0.535	0.493	0.506

Well-beingの認知的要素の測定としてSWLSを示している渡邊・Chen（2023）のスコア評価によると、SWLSの得点評価は「非常に満足（31-35点）」「満足（26-30点）」「少し満足（21-25点）」「20点（どちらともいえない）」「やや不満足（15-19点）」「不満足（10-14点）」「非常に不満足（5-9点）」とされている。本研究で得られた被験者のSWLS得点は「23.48」であった。

4. 考察

紙面の都合上簡潔に傾向をまとめると、まず参加者の傾向としては20代の男女が最も多く、参加者のほとんどが20代であった。これは産業能率大学のスペシャルゲームであるところから、大学生を中心とした20代の若者が多く集まったことが要因として大きいと推察される。小学生以下の子どもは男子が多かったが、その多くが少年野球チームのユニフォームを着ていることが目立ったところから、地域の少年野球チームの来場者が多かったことが推察される。

まず子ども被験者のPERMA得点から推察されるのは、総じて得点が高いが、「M（Mean）」が相対的に低いことが伺われる。今回のフィードバックカウンセリングにおいて、子どもにMを説明する際、「夢があるか」「憧れる人はいるか」「自分は大事であると感じているか」といった概念を用いて理解を促した。そのような観点から考えると、来場された子どもたちは、自分に価値を感じることが低く、夢をもつことが困難であり、憧れる人がいない、というような心理的状態にあることが推察される。この点は、今後プロ野球をはじめスポーツマネジメントが現代の子どもたちに「夢を与えること」「憧れの人となるようなロールモデルを示すこと」「スポーツを通じて自分の人生に肯定的な意味と価値を抱くことができるようになること」という課題があることを示唆していると考えられる。

次いで一般の被験者（中学生以上）であるが、こちらも総じて高い数字が示されていたが、相対的に「Mean（人生の意味や価値、志、使命など）」と「Accomplishment（達成感、成長、成功など）」の低さが伺われた。この点は、プロ野球をはじめスポーツマネジメントには人々の人生の意味や価値の向上、達成感を味わうような成功体験や成長を実感できることがファンのニーズとしてあることが伺われる。たとえば、ベイスターズファンであることを誇りにもてたり、達成感や成長を実感できる成功体験を得ることができたりするサービスなどを一層強化することは有意義であると考えられる。また人生満足度とPERMAの相関からは、とくに「Relationship（良い人間関係、絆、感謝など）」と人生満足度の相関が相対的に高いことが示されている。この点からは、ファン同士の関係性の向上や、選手とファンとの関係性の向上、さらには観戦に来た人たち同士の関係性（家族、恋人、友達等）の向上といったことが潜在的なニーズとしてあることが伺われる。

5. まとめ

本稿では、ボールパークにおける来場者のWell-beingに関する心理を検討することを目的として、PERMAの測定と人生満足度の測定を行い考察した。結果および考察に示されたとおり、本イベントに興味関心を示していただいた方は総じて人生満足度が高い傾向にあったが、人生における意味や価値、志、使命といったことを一層向上させることに意義があることが伺われた。本研究がスポーツマネジメントの発展に微力でも貢献できれば幸甚である。

6. 引用文献

角野善司（1994） 人生に対する満足尺度(the Satisfaction With Life Scale [SWLS])日本版作成の試み 日本教育心理学会総会発表論文集 36 (0), P.192.

Seligman, M. E. P. (2011) Flourish New York, Simon & Schuster.

渡邊淳司・Chen, D. (2023) ウェルビーイングのつくりかた BNN

06 大学運動部サポートプログラム：第8期リーダーシップ養成プログラムの実施報告

経営学部 教授 齊藤 弘通

本学スポーツマネジメント研究所では、本学運動部員のキャリア形成や人間的成長を支援するためのサポートプログラムを展開し、本稿で述べる「リーダーシップ養成プログラム」もその1つとして位置づけられている。筆者は、本学運動部員を対象とした「リーダーシップ養成プログラム」の企画および講師を2017年度より担当している。

本稿では、2024年度、大学運動部特別強化クラブ部員に対して実施した「第8期リーダーシップ養成プログラム」において受講者がどのような気づきを得たかについて、受講者が記述したオンラインレポートのテキストデータを分析し、報告する。

1. 2024年度の実施概要

2024年度も、大学の特別強化クラブであるサッカー部と野球部から選ばれた12名の学生を迎え、2024年11月から12月にかけてオンラインによる全5回の研修プログラム（各回100分）を実施した。

第1回では、まず「リーダーシップとは何か」、その本質について学んだあと、リーダーシップを発揮するうえで必要とされる24のコンピテンシー（能力や特性）について、自己診断を行った。第2回以降は、運動部の実際の場面を題材としたケーススタディやロールプレイ、動画の視聴を通じて、リーダーとして必要な考え方や行動のポイントを学んでいる。

2024年度は具体的には、以下のようなテーマを扱った。

- ・メンバーに対して、論理的でわかりやすい指示を出す方法
- ・チームが抱える課題を整理し、解決へと導くための思考プロセス
- ・チームミーティングで話し合いをスムーズに進めるファシリテーションスキル
- ・メンバーそれぞれの性格やコミュニケーションスタイルに応じた関わり方
- ・リーダーとして自分自身が主体的に行動するための意識の持ち方
- ・チーム内でリーダーシップを分かち合う「シェアド・リーダーシップ」の考え方

こうした実践的な学びを通じて、学生たちは自分のチームに持ち帰って活かせるリーダーシップの力を、少しずつ高めている。

さらにこのプログラムでは、毎週、自分が特に意識して取り組むコンピテンシーを一つ選び、1週間の活動（運動部の活動や大学でのゼミ活動等）の中で実践するよう促している。そして次回のセッションでは、その取り組みを振り返る時間を設けることで、日常の中でも学びを活かす意識づけを図っている。

2. 受講者の気づきに関する分析

このプログラムでは、各回の終了後に、受講者が研修を通じて得た気づきや考えたことをオンラインレポートとして提出している。ここでは、12名の受講者によるレポート内容をテキスト分析し、彼らが研修からどのような気づきを得たのかを整理することで、プログラムの効果を確認するとともに、今後のプログラム改善やリーダー育成に向けた示唆を述べる。

オンラインレポートのテキスト分析[1]の結果、受講者の気づきは大きく8つのカテゴリに分類できることが確認された。以下では、それぞれの気づきについて、代表的な記述を抜粋しながら、具体的な内容を紹介する。

①リーダーとリーダーシップの違いへの気づき

1つ目は、「リーダーとリーダーシップの違いへの気づき」である。

レポートからは、多くの受講者が、研修前はリーダーを「特別な立場や肩書きを持つ人」と捉えていたことがうかがえる。しかし研修を通じて、「リーダー」とは特定の役職に限られるものではなく、状況に応じて誰もが担える「役割」であること、そして「リーダーシップ」とは、誰もが日常の中で発揮できる行動や影響力である、という認識へと変化していったことが確認された。

【代表的なテキスト例】

まずリーダーとリーダーシップの違いを明確に理解することができたことが印象に残っています。今まで何となくわかっていたことでしたが、いざその言葉の意味を聞かれたときに出てきませんでした。リーダーはその立場の名称のことでリーダーシップはリーダーがフォロワーに与える影響力のことだと分かりました。また、リーダーシップは立場関係なく発揮できるものだということも学びました。

②多様なリーダーシップ像への気づき

2つ目は、「多様なリーダーシップ像への気づき」である。

レポートからは、受講者が研修を通じて、「先頭に立って引っ張る人」だけがリーダーではないことに気づき、自分自身の強みや個性に合ったリーダーシップのあり方を模索するようになっている様子が読み取れた。これにより、リーダーシップのスタイルは一つではなく、多様であるという理解が深まっていることが確認された。

【代表的なテキスト例】

「今回の講義を受け、リーダーシップのことを少し勘違いしていたことに気がついた。私の考えるリーダーシップは、集団の先頭に立って指示をしたり、檄を飛ばしたりするというようなものだった。しかしそれは1つのリーダー像にすぎないということが分かった。リーダーシップには発言で引っ張る、行動で示す、頭を使いまとめるなど、様々な角度でのアプローチの仕方がある。自分の能力、特性に合ったリーダーシップを探し、それを実践することで、より素晴らしいリーダーになることができる。」

③フォロワーの重要性への気づき

3つ目は、「フォロワーの重要性への気づき」である。

レポートからは、受講者が「最初のフォロワー」の存在がリーダーシップを成立させるうえで重要な役割を果たすことに気づいた様子がうかがえた。また、「最初のフォロワー」を生み出すためには、リーダーが指示や命令によって動かすのではなく、自然と人がついていきたくなるような姿勢や雰囲気づくりが求められるという理解も深まっていた。

【代表的なテキスト例】

リーダーとして最初のフォロワーをどうつくるか？といった点もリーダーシップをとる上で大切になってくると学びました。踊っている人の動画にもありましたが難しいことをやるのではなく、簡単なことから始める、喜んでついていけるのかと考えながらやっていきたいと思いました。自分の今の立場に置き換えると、残留が掛かった試合に対して絶対に勝たなければいけない、全員が一つ一つのプレーや勝敗に対してこだわりを持って行かないといけない。そんな中で簡単にできることは声掛けの部分だと

1　オンラインレポートの記述内容の分類は、OpenAI 社が提供する生成 AI（ChatGPT-4o）を用いて行った。但し、AI の出力はあくまで補助的手段とし、最終的なカテゴリの決定および解釈は筆者の判断によって行っている。

思いました。

④明確な目標設定の重要性への気づき

4つ目は「明確な目標設定の重要性への気づき」である。
レポートからは、受講者が研修を通じて、「SMART（具体的・測定可能・達成可能・関連性・期限）」というフレームを活用した目標設定の大切さを学んだことがうかがえた。

また、曖昧なスローガンや目標ではチームの力を十分に引き出すことができないという認識が芽生えていることも確認された。

【代表的なテキスト例】

自分が今後チームを引っ張っていく立場になったときに目標設定をするうえでSMARTを意識してやっていきたいなと思いました。今までの自分は明確に目標を提示できていなかったので、来年・再来年、自分がそのような立場になったとしたら測定可能で時間制限なども明確にして目標に対してやるべきことが全員に分かりやすく伝わるようにしていきたいと思います。またそのように目標が具体的なことにより、やる気も引き起こってくると思うし、簡単すぎない目標を立てることでもやる気が起きチームとして活気のある練習をしていけると思うので、そういったところも意識してやるべきだなと思いました。

⑤自責思考と当事者意識の重要性への気づき

5つ目は「自責思考と当事者意識の重要性への気づき」である。

レポートからは、受講者が研修を通じて、これまで「チームの雰囲気が悪いから」「周りが動かないから」といったように、結果が出ない原因を他者のせいにしがちだった自分に気づいたケースが見られた。また、成果や課題を自分ごととして捉え、「リーダーとして自分に何ができたのか」を考える姿勢（＝自責思考）が、周囲からの信頼を得るうえで重要であることに気づいたケースも確認された。

【代表的なテキスト例】

リーダーは他責ではなく自分のことだと思って問題を抱える姿勢が大切だなと思いました。またリーダーだけではなくそのほかの選手たちも他責ではなく自責で問題などを抱えられたらそのチームは強いチームになると思うし前向きな状況になると思うのでそのようなチームにしていくべきなんだなと思いました。

⑥ソーシャルスタイル理論による対人理解の重要性への気づき

6つ目は「ソーシャルスタイル理論による対人理解の重要性への気づき」である。
レポートからは、受講者が研修を通じて、人には「支配性」と「感情開放性」という2つの軸に基づいた4つの行動スタイル（P型・C型・F型・A型）があることを学び、それぞれのタイプを理解することが、対人関係における対応力を高めるうえで有効であるという気づきが得られていることが確認された。

【代表的なテキスト例】

自分はチームメイトとのコミュニケーションを盛んにしていくことが課題の一つだと思っているので、ソーシャルスタイルを活用していければいいなと思いました。この理論に則ると、私はCの「主導型」でした。Cタイプのリーダー像と似たところはあったので、自分を客観視することに繋がりました。この授業を履修しているメンバーの中でもそれぞれのタイプがあって、個性を感じました。この個性を理解しようとすることがコミュニケーションの第一歩だと思いました。

⑦ファシリテーションの重要性への気づき

7つ目は「ファシリテーションの重要性への気づき」である。

レポートからは、受講者が研修を通じて、チームミーティングにおける話し合いの進め方や問いの立て方、意見の引き出し方が、ミーティングの質に大きく影響することに気づいた様子がうかがえた。

【代表的なテキスト例】

普段の生活の中で私が議論で意識している点はなるべく全員が思っていることを引き出そうと、枠組みを作らず自由に発言させることでした。正直、今回の授業を受けていなかったら気づけなかった部分だったのでここは普段の話し合いの中で修正していきます。確かに、とりあえず意見を求めるのは自由な発言が多くなり、結果的にあまりまとまらない対話もいくつか経験してきました。これからはまず、枠組みを作り、多様な観点から議論していきたいと思います。そして重要な点としては、すぐに結論を出そうとしないこと。これを意識して次の議論の場では活かしていきたいです。

⑧シェアド・リーダーシップの必要性への気づき

8つ目は「シェアド・リーダーシップの必要性への気づき」である。

レポートからは、受講者が研修を通じて、リーダーがすべてを一人で抱え込むのではなく、チーム内の複数のメンバーが、それぞれの得意な場面でリーダーシップを発揮する「シェアド・リーダーシップ」の考え方に共感している様子が確認された。また、チーム全体でリーダーシップを共有することで、より柔軟で持続的なチーム運営が可能になるという理解が深まっていた。

【代表的なテキスト例】

万能な人は当然いない。そうなるとやはりこのシェアド・リーダーシップの考え方が重要だと感じた。実際にこのシェアド・リーダーシップのようなことを既にやっていた。学年代表は2人いて私もその1人なのだが、何か全体にアナウンスするとき、その際言語化することが比較的得意な私が文章や言い回しを考え、信頼が大きいもう1人が発信するという形をとっている。これも1つのシェアド・リーダーシップだと思う。このやり方はすごくいいとは何となく感じていたので、この授業でなぜ良かったのかを明確に理解することができた。これ以外にも必ず応用できる方法だと思うし、これから100人を軽く超えるチームを動かしていくには役割分担が必要。活用していこうと思った。

このように、全5回という限られた回数のオンライン研修であったにもかかわらず、受講者のレポートからは、多くの学びや気づきが得られていることが明らかとなった。

3.受講者の気づきを踏まえたプログラムの改善の方向性

最後に、受講者の気づきをもとに、次回以降の研修で試してみたい演習のアイデアをいくつか紹介したいと思う。

「多様なリーダーシップ像」への理解を深める演習

●自己理解を深めるワーク（例：パーソナル診断）と組み合わせながら、さまざまなリーダーシップの成功事例を学び、自身に合ったリーダー像を描けるよう支援する。

「影響力としてのリーダーシップ」を考える演習

●肩書きや立場に関係なくリーダーシップを発揮した実例を紹介し、「リーダーシップ＝影響力」であるという本質について考えるきっかけをつくる。

「フォロワーづくり」体験型ワーク

●フォロワーづくりを「関係性づくり」として捉え、信頼や共感に基づく言動を通じてフォロワーを得る体験を行い、その後の振り返りを通じて気づきを深める。

課題対応力を育むシミュレーションワーク

●実際にチームで起こり得る課題や葛藤場面を題材に、「自分ならどうするか？」を考えるワークを実施し、課題に対する主体的な関わり方を養う。

シェアド・リーダーシップ醸成のための強み共有ワーク

●チームの中でシェアド・リーダーシップを発揮するために、自己と他者の強みを言語化し、役割分担を考えるワークを通して、協働のあり方を具体的にイメージできるようにする。

2025年度で「リーダーシップ養成プログラム」は9年目を迎える。今後は、上記で紹介した新たな演習案も取り入れながら、大学運動部においてリーダーとしての役割を担う学生にとって、より有益な学びの場となるよう、引き続きプログラムの運営に努めていきたい。

07 サッカー部3年生対象キャリアサポートプログラム「サッカーと私ーこれまでとこれからー」その2

情報マネジメント学部 教授　中川 直樹

本研究所では、特別強化クラブであるサッカー部部員を対象としたキャリアサポートプログラムを開講している。1年生を対象としたプログラムは、プロサッカー選手という存在やプロサッカー選手として求められる資質について考える内容である。それに対して、今回実施した3年生対象のプログラムは、これまで各自が歩んできたサッカーキャリアを振り返り、これからの進路について考える上でのヒントを提供する内容となっている。今回はその2として大学生アスリートに対する進路選択に関するサポートの重要性から、我々が実施しているプログラムの意味を検討した。

アスリート学生におけるキャリア形成支援の必要性

先行研究（清水ら、2016）によれば、大学生アスリートがいわゆる体育会運動部での経験を通して獲得したライフスキルが、卒業後のキャリア形成と連繋している実態が報告されている。しかしながら他方で、大学生活の大半をトレーニングなどの部活動に充てている現状から、時間的制約等によって学業や就職活動に対する十分な時間をかけられないことが、大学生アスリートのキャリア形成に負の影響を与えていることが指摘されている（Martens, P. and Lee, K. 1998）。

大学生のキャリア形成に関する先行研究において、キャリア選択に関する自己効力感の重要性が指摘されており、これを高めるためには特に遂行行動の達成を重ねる経験が必要であることが報告されている（戸田、2018）。進学する大学が決定するまでに、スポーツ推薦制度が関わっている場合が多く、自己意思以外の決定要因が働く傾向があることも考えると、特に競技生活へのピリオドを打ち就職活動を始める学生にとっては、自らの意志で進路選択を行うことが初めてとなることが推測できる。高城ら（2020）による大学生アスリートと一般学生の進路選択に関する特徴を明らかにした研究によると、大学生アスリートは進路選択に対する自己肯定感のスコアは一般学生とは変わらないものの、進路選択に対する結果期待スコアが有意に低くなったことを示している。また、進路選択に対する自己効力感や結果期待のスコアを学年グループ別に比較すると、自己効力感については学年グループによる有意差は認められなかったものの、結果期待については3・4年生のグループの方が1・2年生のグループよりも優位にスコアが高くなった。この結果を説明する理由として、低学年のアスリートは一般大学生と比較して企業説明会、就職セミナー、インターンシップへの参加が少ないためではないかという説明を行っている。

つまりは、本気でスポーツに取り組んだ結果として、社会人として活躍できる素養は身につけているものの、キャリア形成に関する知識やスキルが不足しており、またその素養をピッチ外で発揮する経験に乏しいことから、卒業後のトランジション（フルタイムの学校教育を修了して、安定的なフルタイムの職に就くこと）に円滑に移行できないアスリート学生が存在し、その支援策の提供が求められているということである。

今日においてアスリートのセカンドキャリアに関する問題が指摘されているが、その本質はアスリートが競技生活の引退後に、本気でスポーツに取り組んだことによって培ったLS等の能力を発揮する機会が十分に与えられていないという点である。ヨーロッパ諸国（EU）では、引退後のアスリートに対する職業訓練や就業支援、つまりセカンドキャリア支援では遅すぎるという問題意識からデュアルキャリアという概念が生まれ、2012年にEUガイドライン2012（EU

表2　大学生全般とアスリートに求められるライフスキル間の対応関係

大学生全般に求められるライフスキル		対応関係にあると考えられるアスリートに求められるライフスキル
親和性	⟷	ストレスマネジメント コミュニケーション
リーダーシップ	⟷	責任ある行動
計画性	⟷	目標設定
情報要約力	⟷	考える力
前向きな思考	⟷	ストレスマネジメント
対人マナー	⟷	礼儀・マナー
感受性		
自尊心		

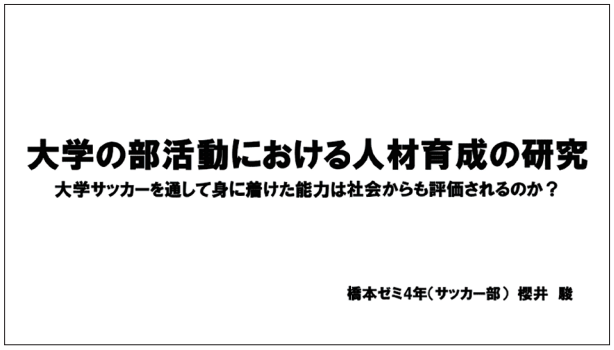
注）アスリートに求められるライフスキルのうち，最善の努力，勝敗の受容，感謝と謙虚さ，体調管理については対応関係は認められず

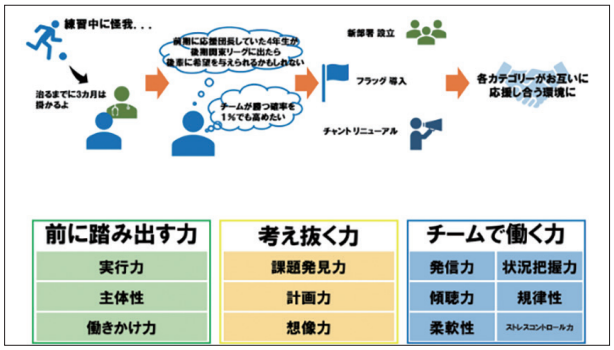
（島本ら，2013 スポーツ心理学研究）

Guidelines on Dual Careers of Athletes）を発表している。我が国においても2012年のスポーツ基本計画においてデュアルキャリアについての意識啓発や関係団体と協力の下でのアスリートのキャリア形成のための支援推進が謳われている。さらに、2019年に発足した一般社団法人大学スポーツ協会（UNIVAS）においても、学業と競技の両立を通じてキャリア形成（デュアルキャリア）を図ることを推奨している。

3年生部員対象キャリアサポートプログラムを実施

2022年度から本研究所では、サッカー部員のキャリア形成支援の一環としてのキャリアサポートプログラムを実施している。2024年度は、12月20日（金）に「サッカーと私−これまでとこれから−」を小野田研究員と共に実施した。プログラム前半は、1年次に参加したキャリアサポートプログラムにおいて提出したまとめのレポートに目を通したり、事前に回答してもらったこれまでの自分とサッカーの関わりに関するアンケート結果を解説したりして、自分の内面的変化を考察するきっかけを提供した。後半の初めには、サッカー部の4年生（櫻井駿君）が、サッカー部活動から身についたライフスキルは社会で通用するのかを卒業研究のテーマとして取り組んだ成果発表を行った。その後、論文をもとに、アスリートがライフスキルを獲得する上で恵まれた環境にいることやこれまでの調査研究によりライフスキル獲得レベルが、運動部に所属していない大学生に比べ高くなる傾向にあること、そしてライフスキル獲得レベルの自己評価は競技成績に左右される可能性があることも説明した。そして、アスリート人材を評価する企業からの情報について解説した。最後には、改めて自分のモチマエを自己評価した上で、今後のサッカーとの付き合い方や進路との向かい合い方についてグループワークを行った。





参加者からのコメント

以下に、アンケートにて回収した参加者からのコメントの一部を紹介する。

●サッカーをしてきた中でそこで学んだ事が、これからの人生にも役に立つんだなという事を改めて確信を持てたので良かったです。

●社会人基礎力と今までのサッカーから得た経験値や、スキルというものはどのような場面で繋げられるのかというのを特に先輩からの話で考えることができたのでいい機会になりました。

●今回の研修に参加して今自分たちが取り組んでいることは社会で通用するものであること、将来生きていく上でとても大切なことであると学ぶことができた。だからこそあと一年サッカー部での活動を貴重なものであると認識し一日一日を大切に生きていくことが大事である。社会に出た時に活躍できるようにサッカー部での活動に真剣に取り組み今ある武器をさらに磨き、自信をつけて卒業できるようにする。

●自分の将来としっかり向き合わないといけないと改めて思いました。今回で就活をしてくださいというわけではなくしっかり考えることが大切だと思ったので自分が納得できるキャリアになるように考え行動したいと思いました。

終わりに

「あなたは残された学生としての生活の中で、何に取り組みたいと考えていますか。」という参加者アンケートの問いに、「大学での学修と部活動の両方を頑張りたい」という回答が目立った。本学サッカー部では、モットーとして「文武一道」を掲げており、その本質を理解している姿が浮き彫りにされていると考えられる。3年生のシーズン終了時というタイミングでは、将来に向けてサッカーかそれ以外かの決断を迫られる場面があると思われるが、この選択肢にサッカーもそれ以外もという考えが加わることの意味を3年生部員と共に模索し、より良いサポートプログラムが構築できるよう進めていきたい。

参考文献

1. 高城佳那ら（2020）　大学生アスリートの進路選択における自己効力感と結果期待. 環太平洋大学研究紀要, 16, 27-34.

2. 清水聖志人ら（2016）　大学生トップアスリートの卒業後における雇用状態とライフスキルの関連：卒業後4年間に渡る縦断調査の結果より. スポーツ産業研究,26, 303-313.

3.岡田悠佑ら（2024）　アスリート学生のキャリア選択自己効力感を高めるキャリア教育の方法に関する研究：利用価値介入を組み込んだアウトリーチ型キャリア教育の効果検証を通して. 東京体育学研究, 15, 5-15.

08 スポーツ関連データを用いた表計算スキル修得
ー必修科目における興味と理解の促進ー

情報マネジメント学部 教授　小野田 哲弥

2024年度も社会調査の専門性を活かし「パリ五輪に関するアンケート」等を実施した。その結果は大学ホームページにて公開しているため（https://www.sanno.ac.jp/news/pressrelease/20240830_01.html）、本稿では当該調査を含むスポーツ関連データの活用によってもたらされる「教育効果」について取り上げる。2022年度から2024年度までの３年間、情報マネジメント学部１年次必修科目『情報活用演習』の科目主務者を務めた。この科目はMicrosoft社Excelの基本的スキル修得を目的とした科目である。演習教材として本研究所オリジナルの調査データを提供したことにより、多くの学生の興味が喚起され、理解が深まる効果が得られた。その成果について以下に報告する。

1. データ利用の背景

筆者はマーケティングやスポーツといった専門分野の学会の他に「コンピュータ利用教育学会」にも所属しており、ＩＴＣを活用した教育方法にも大きな関心を寄せている。それを当事者として実践する機会となったのが『情報活用演習』の科目主務者としての教材開発であった。

この科目は1年次の後学期に開講される必修科目であり、上級学年での研究や、卒業後にビジネスパーソンとして活動する際に必須となるExcelの基本スキル修得を目指す。「必修科目」とはすなわち履修が義務づけられた科目である。自らの意思に基づいて履修できる「選択科目」とは異なるため、授業運営においては、学生の興味関心をいかにして高めるかに苦心することとなる。

他方でこの科目が実施される情報マネジメント学部は、専門コースの一つに「スポーツマネジメントコース」が設置され、コース横断プロジェクトとして『スポーツ・プロモーション』を擁するなど、スポーツに力を入れる学部である。特別強化クラブのサッカー部、女子ビーチバレー部をはじめ体育系団体の活動も盛んであり、スポーツを好む学生が多いことも特徴として挙げられる。

上記背景から、教科書に付属している仮想的なダミーデータ（店舗売上の集計など）だけでは学生の興味を持続させることが難しい。だがその課題は、スポーツ関連データの利用によって改善できるのではないかと思われた。幸い、筆者は本研究所において実施したリアルなスポーツ調査データを数多く所持している。したがって主務者として教材開発に取り組むにあたり、それらの提供を試みることにした。

2. 科目概要と到達目標

本科目は大きく、Ⅰ.数式・関数、Ⅱ.グラフ・データベース、Ⅲ.総合演習の３フェーズに分かれる。教科書に基づいた「インプット」としてⅠ・ⅡでExcelのスキルを吸収し、「アウトプット」を意識したⅢにおいて、各自でテーマを設定し、仮説を立ててデータを分析し、プレゼンテーションまでを行う。

スポーツ関連データは、フェーズⅠ・Ⅱの授業外学習（いわゆる「宿題」）の一部においても提供しているが、メインで提供するのはフェーズⅢであり、そこでは最新調査の詳細なローデータを提供する。なおスポーツに関心のある学生ばかりではないため、本学のコンテンツビジネス研究所の協力を得て、同研究所が実施している「メディア・コンテンツ利用調査」の最新ローデータも提供し、それら２種からの選択式としてⅢを実施している。

本科目の到達目標としては以下の３つを掲げた。1の「普段使い」を定着させるためにも、学生たちが興味を惹かれるデータを利用することが望ましい。また2を満たすため、授業外学習に対する教員指導と、総合演習プレゼンに対するクラスメイトからの評価という「フィードバック」を重視している。そして3の「主体性」を養うため、授業外学習の多くは要件（関数指定など）を満たせばテーマ設定は自由である。また総合演習は多くの変数を含み、様々な角度から分析のできるデータを提供している。

1. **Excelの基本的な数式や関数を、日常的に活用することができる。**
2. **他者の視点を持ち、見やすい表やグラフに整えることができる。**
3. **主体的にテーマを発見し、データ分析を行って考察することができる。**

3. 数式・関数理解に適したデータ特性

教材作成を行い学生の反応を見る中で、まず気づかされたのは、本研究所の独自データに限らず、スポーツ関連のデータはExcel演習に適合的なものが多いという点であった。数式利用としては、プロ野球選手の「打率」計算、Jリーグの「勝点」計算などが想起しやすいだろう。

スポーツでは表1のように、優劣が降順（大きい順）で定まる競技もあれば、その逆に昇順（小さい順）の競技もある。いずれ

にしても「並べ替え」の操作は避けて通れない。また、個人成績にせよチーム成績にせよ「順位」表示が一般的なため、RANK.EQ関数の利用頻度も高い。RANK.EQ関数は図1のように「範囲」の引数が固定、すなわち「絶対参照」のため、Excelを扱う上で不可欠な概念である絶対参照・相対参照も感覚的に身につけられる利点がある。

この科目の中で学生たちが最も躓きやすい学習項目はVLOOKUP関数であるが、チームスポーツでは「背番号」によって一意に選手が特定されるため、この関数との相性も抜群である。図2のように、背番号をもとに当該選手の各種情報を取り出す演習を通じて、学生たちは4つの引数（検索値、範囲、列番号、検索方法）がもつ意味を難なく理解できている。

4. クロス集計による探究力の強化

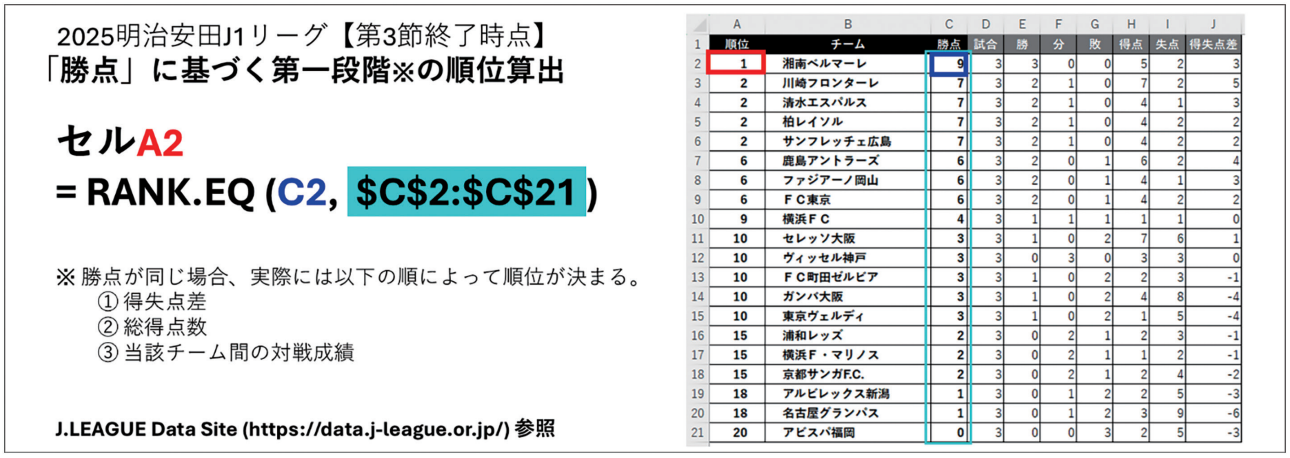
筆者の全国調査における主要な基本属性は、デモグラフィック属性に分類される①性別、②年代、③都道府県の3つである。「ピボットテーブル」について学ぶ際には、これらの基本属性と、意識調査のサイコグラフィック属性とを掛け合わせることよりクロス集計に慣れる。

図3は授業外学習に対するフィードバックとしての模範解答例であり、ウィンタースポーツであるスノーボードの経験率が、北海道民や東北地方の県民よりも東京都民の方が高いという「意外性」をニュース風に紹介した資料だ。このような意外性への「気づき」を端緒に、それはなぜかという「問い」に対する「仮説」を立て「検証」することの意義を伝え、フェーズⅢに対するマインドセットを醸成していく。

表1. スポーツにおける優劣の例

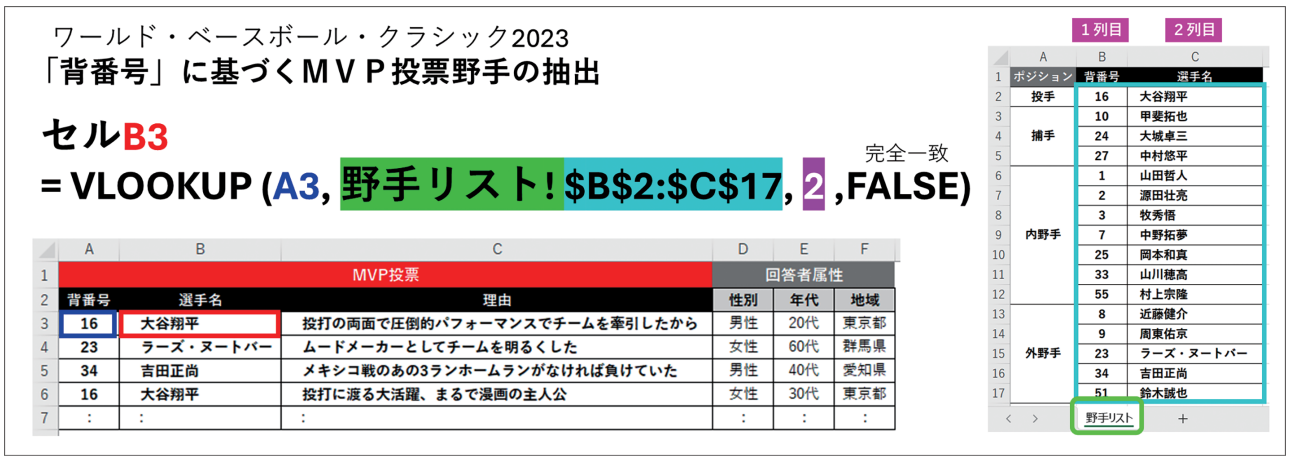
競技	降順（数値が大きい方が優れている）	昇順（数値が小さい方が優れている）
プロ野球※	チーム成績（勝率）　投手成績（勝利・セーブ数・奪三振など） 打者成績（打率・本塁打数・打点・盗塁数など）	投手成績（防御率）
陸上	投てき（ハンマー投げ・やり投げなどの距離） 跳躍（棒高跳びの高さ・走り幅跳びの距離など）	トラック競技（100m 走・ハードル・リレーなどのタイム） ロード（マラソン・競歩などのタイム）

※ チームの「勝率」が並んだ場合の順位決定方法はセ・リーグとパ・リーグとで異なる。
打率は「規定打席」以上、防御率は「規定投球回」以上が条件のため、Excelで求める際にはIF関数を用いた条件分岐も必要となる。



順位	チーム	勝点	試合	勝	分	敗	得点	失点	得失点差
1	湘南ベルマーレ	9	3	3	0	0	5	2	3
2	川崎フロンターレ	7	3	2	1	0	7	2	5
2	清水エスパルス	7	3	2	1	0	4	1	3
2	柏レイソル	7	3	2	1	0	4	2	2
2	サンフレッチェ広島	7	3	2	1	0	4	2	2
6	鹿島アントラーズ	6	3	2	0	1	6	2	4
6	ファジアーノ岡山	6	3	2	0	1	4	1	3
6	ＦＣ東京	6	3	2	0	1	4	2	2
9	横浜ＦＣ	4	3	1	1	1	1	1	0
10	セレッソ大阪	3	3	1	0	2	7	6	1
10	ヴィッセル神戸	3	3	0	3	0	3	3	0
10	ＦＣ町田ゼルビア	3	3	1	0	2	2	3	-1
10	ガンバ大阪	3	3	1	0	2	4	8	-4
10	東京ヴェルディ	3	3	1	0	2	1	5	-4
15	浦和レッズ	2	3	0	2	1	2	3	-1
15	横浜Ｆ・マリノス	2	3	0	2	1	1	2	-1
15	京都サンガF.C.	2	3	0	2	1	2	4	-2
18	アルビレックス新潟	1	3	0	1	2	2	5	-3
18	名古屋グランパス	1	3	0	1	2	3	9	-6
20	アビスパ福岡	0	3	0	0	3	2	5	-3

図1. スポーツデータを使用した RANK.EQ 関数の演習例



MVP投票			回答者属性		
背番号	選手名	理由	性別	年代	地域
16	大谷翔平	投打の両面で圧倒的パフォーマンスでチームを牽引したから	男性	20代	東京都
23	ラーズ・ヌートバー	ムードメーカーとしてチームを明るくした	女性	60代	群馬県
34	吉田正尚	メキシコ戦のあの3ランホームランがなければ負けていた	男性	40代	愛知県
16	大谷翔平	投打に渡る大活躍、まるで漫画の主人公	女性	30代	東京都
：	：	：	：	：	：

ポジション	背番号	選手名
投手	16	大谷翔平
捕手	10	甲斐拓也
	24	大城卓三
	27	中村悠平
内野手	1	山田哲人
	2	源田壮亮
	3	牧秀悟
	7	中野拓夢
	25	岡本和真
	33	山川穂高
	55	村上宗隆
外野手	8	近藤健介
	9	周東佑京
	23	ラーズ・ヌートバー
	34	吉田正尚
	51	鈴木誠也

図2. スポーツデータを利用した VLOOKUP 関数の演習

主務者を担当した3カ年のフェーズⅢにおける提供データを表2に示した。2024年度の列数が突出して多い理由は、種目数と日本代表選手数が膨大であり、それぞれに対して認知度・視聴満足度を尋ね自由記述欄を設けていることによる。その2024年度において高評価を博した最終プレゼンの抜粋が表3になる。これらの事例からも、スポーツ関連データの提供がいかに学生たちの興味を刺激し、主体的な探究を行う動機づけに寄与しているかが窺い知れるに違いない。

以上、本稿ではこれまで一次利用の紹介に留まっていた本研究所の大規模調査データの二次的な「教育利用」の有効性について論じた。スポーツ事象それ自体の研究を深めることに加え、学生教育への還元も意識しながら、今後とも本研究所の活動に従事していきたい。

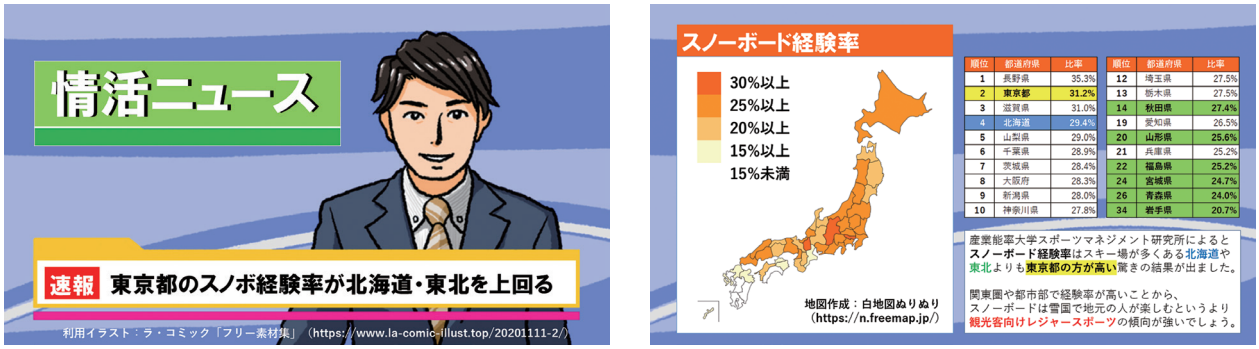


図3. 授業外学習に対するフィードバック例

表2. 総合演習用に提供した本研究所実施調査のローデータ

年度	調査対象にした大会	調査期間（年はそれぞれ年度内）	サンプル数（行数）	提供データ列数
2022	サッカーW杯カタール大会	スクリーニング：11月9日～11日 本調査：12月21日～23日	スクリーニング：10,000s 本調査：1,000s （いずれも最新人口推計の性別・年代・居住地域比率に基づいて回収）	291
2023	女子サッカーW杯 男子バスケットボールW杯 男子ラグビーW杯 男女バレーボールW杯	スクリーニング：9月2日～5日 本調査：11月2日～5日		266
2024	パリ五輪	スクリーニング：7月16日～18日 本調査：8月14日～16日		3,897

表3. 2024年度『情報活用演習』優秀プレゼンの抜粋（敬称略）

学生氏名	クラス担任	発表タイトル	高評価のポイント
大塚 結姫	仁宮 裕	兄弟・姉妹選手　強さの理由	知名度の高い選手の中に2組の兄妹を発見（阿部一二三選手と詩選手、張本智和選手と美和選手）。冬季五輪におけるノルディック複合の渡部兄弟やスピードスケートの高木姉妹にも一般化し、その背景を探った。
木川 侑香	小田 真由美	パリオリンピックの視聴率とスポーツ人口の関係	各競技において最も視聴された種目の「回答人数」と「競技人口」を1枚の複合グラフ上に表現。両者とも高い競技（サッカー・ゴルフなど）がある一方で、前者が高い「体操」と後者が高い「テニス」が存在する理由について探究。
清水 梅華	丹羽 恵理子	今後人気が出てきそうな競技	2024 パリ五輪において新競技の「ブレイキン（ブレイクダンス）」が注目を集めたことから、2028 ロス五輪の追加競技を取り上げ、中でも初採用の「スカッシュ」と120年ぶり復活「ラクロス」の魅力について紹介した。
善波 帆香	小野田 哲弥	オリンピックの光と影 -競技の人気と課題を探る-	「メダル獲得情報」と「ライブ視聴者数」をもとに4象限化し、光の当たる競技は「短時間で勝敗が決まる」のに対し、メダルを獲得しながら後者が伸びなかった競技の特性として「長時間かつルールの理解が難しい」点を導出。
松澤 小春	清原 悠	ビーチバレーを国民的な競技にしていくには？	ともに五輪種目でありながら、関心度に大きな開きのある「バレーボール」と「ビーチバレー」に着目。図書館データベースの『日経テレコン 21』も活用し、前者が注目される要因と、後者の認知度拡大のための施策を提言した。

謝辞

『情報活用演習』の教材は担当教員の先生方（50音順に、小田真由美先生、勝間豊先生、清原悠先生、田中慎太郎先生、田辺公一朗先生、中野耕助先生、仁宮裕先生、丹羽恵理子先生、渡邊司揮先生）の尽力により年々改良されてきました。多くの学生が達成感を享受できているのも熱心な指導の賜物と感謝いたします。また「メディア・コンテンツ利用調査」のデータを快く提供いただいたコンテンツビジネス研究所所長の北川博美教授にも厚く御礼申し上げます。

09

2024年度 本学姉妹校 銘傳大学「スキー・日本文化体験研修」実施報告

スポーツマネジメント研究所
研 究 員　駒澤 恵一、髙瀬 裕也、中川 直樹
客員研究員　行方 剛

本研修の開催は今年度で4回目である。2018年に初めて開催され、途中コロナ禍による中止期間を挟んだものの、昨年に続き2年連続の開催となった。これまで3回実施する中で本研究所が培ってきた経験や、参加学生のフィードバックを基にプログラムのブラッシュアップを図っており、プログラムも成熟してきた。今年度は研修前半を新潟県湯沢町にてスキー研修を行い、後半は本学自由が丘キャンパスの訪問・東京近郊の観光を主なプログラムとして実施した。

1. 研修実施概要

今年度の研修の概要は以下の通りである。

①日　　程：2025年2月3日（月）～2025年2月8日（土）
（うちスキー研修は 2/3（月）～ 2/5（水）で実施された）
②参 加 者 数：銘傳大学学生15名（男性8名、女性7名）、引率教員1名（男性1名）
③開　催　地：スキー研修は新潟県湯沢町「かぐらスキー場」、本学自由が丘キャンパス、その他班別自由行動（東京近郊）
④宿　泊　先：ロッヂ　サンモリッツ
※本報告は研修前半のスキー研修について報告するものとする。

2. スキー研修までの事前レクチャー

参加者は成田空港からスキー研修を行う湯沢町まで直行で向かうスケジュールであったが、湯沢町にある宿舎への到着は夜中であった。そのため、例年現地で行っているスキー研修中の注意事項やスキー用具の使い方のレクチャーをバス車内で実施した。本研修にはサポート役（本学では「SA（スチューデント・アシスタント）」と呼ぶ。以下SAと記載する）としてスキー同好会のメンバー5名が参加していたが、彼ら・彼女らが事前にレクチャー動画を作成し、バス車内で動画を共有しながら宿舎の施設の使い方やスキー用具の使い方について紹介した。あわせてスキー未経験者がほとんどであるため、スキー技術に関わるレクチャー動画を見ることで、翌日からのスキーイメージを高めた。動画レクチャーは参加者にとても好評であり、マニュアルを読んで理解するよりも圧倒的に理解度が高く、到着してからの施設利用やスキー用具の使い方においてトラブルなくスムーズに進めることができた。また、動画でスキーのイメージを高めることが短い滞在期間におけるスキー技術習得に寄与したものと考える。

3. スキー研修

到着した翌朝に開講式を行い、かぐらスキー場まで移動してスキー研修を開始した。10年に一度と言われる強い寒気が押し寄

せる中でのスキー研修となり、雪が強く降り寒い中での研修であった。慣れないスキーや寒さに気力を奪われると心配したものの、参加者は寒がる様子も見せず、悪戦苦闘しながら必死にスキーに挑戦していた。

昼食時には本学上野理事長から提供された食事が振舞われ、つかの間の休憩時間に安どの表情を見せつつ、午後からのレッスンにエネルギーをチャージしていた。初日の午後からはレベル別に分かれ、それぞれの技術レベルに応じたレッスンを行うことで短期間でのレベルアップを目指した。

スキーを履いた研修は2日間に限定されるものの、研修終了時に多くの参加者がしっかりスキーをコントロールできるようになっており、スキー滑走を十分に楽しんでいる様子であった。2日間を通じて各々がレベルアップしたが、その結果をSAJのバッジテストとして評価され、3名が3級、7名が4級、5名が5級を取得することができた。

4. 雪遊びと日本文化体験

今年度は雪が多かったことから、スキー以外でも雪遊びを思う存分に体験できた。見たことがないかまくらには興奮を隠しきれず穴に入って記念撮影をしたり、雪合戦も自然と始まったりと、大いに盛り上がっていた。

また、2日目のスキー研修が終わった後には、田代・二居観光協会様から雑煮やあんこ餅が提供され、口いっぱいに頬張りながら日本の食文化を体験していた。

5. 歓迎会と日本人学生との交流

滞在2日目には湯沢町から来町の歓迎として、田村正幸町長ならびに本研究所の行方剛客員研究員からご挨拶をいただいた。湯沢町と本学、そして銘傳大学の3者交流が継続されていることの感謝と今後の継続した関係についてお話があった。

湯沢町滞在中はスキーだけではなく日本文化を十分体験できるようイベントを多く用意していた。そのうちの一つとして、歓迎会の後に日本人学生（本学SA）との交流会の場を用意した。SAが日本文化に関わるクイズを参加学生に出して盛り上げりを見せ、参加学生も台湾から持参したお菓子をSAに配り、食を通じての異文化交流が行われていた。

6. まとめ

今年度のスキー研修期間は天候には恵まれなかったものの、その分よりスキーと日本文化体験そのものの楽しさを感じ取っていたように思える。天気が悪い中でもスキーを休む参加者もほとんどいなかったことや、SAとの交流会の様子を見ていても例年以上の盛り上がりを見せていた。天気・天候や景色が良いことが良い思い出になることは言うまでもないが、それらが満たされなくても他のイベントを上手に楽しんでいたように感じた。次年度も台湾からの参加者たちが上手に楽しみを見出せるようなプログラムを本研究所でも計画・検討していきたいと思う。

また、本研究所では参加者に対して毎年参加アンケートを取っているが経年の中で見えてきた変化を紹介したい。「これまでに訪れたことがある国・地域で最も良い場所」という設問にして、昨年は約59%の参加者が「日本」をあげていたが、今年は約87%の参加者が「日本」と回答している。滞在中の満足度が向上している結果であると思われるが、昨今のインバウンド需要に対して受け入れ側の日本も態勢や対応が整ってきていることが要因ではないかと考えられる。

さらに「今回の日本滞在について情報をSNSアップする予定があるか」という設問に対しては、「すでにアップした」、「アップする予定」と80%が回答した。昨年度が約73%であったことを考えるとよりSNSを活用した情報共有が活発に行われていることが分かる。台湾でも日本と変わらずコミュニケーションツールとしてSNSの重要性が増していることが感じ取れる。

最後に、本研修は今年度も多くの方々のご協力によって成り立っている。改めて湯沢町様、田代・二居観光協会様、田代スキースクールの皆様をはじめ、関係者の方々に深く感謝する。また、本学上野理事長および鬼木学長には、多大なる助言と支援を賜ったことに、心よりお礼申し上げる。

10 SANNOスポーツマネジメントのあゆみ（2004-2024）

本学は、湘南ベルマーレ、横浜 DeNA ベイスターズと提携関係を結び、情報マネジメント学部の授業科目の共同開発や研究活動を行ない、大学の行事や活動への協力など、数々の取り組みを展開してきました。本学のスポーツマネジメントの今日までの取組みについて紹介します。

2004年	
4月	『スポーツビジネス実践講座』開講
6月23日	湘南ベルマーレ　SANNOサンクスデー開催
2005年	
7月13日	湘南ベルマーレ　SANNOサンクスデー開催
2006年	
4月	スポーツマネジメント科目2科目を開講
6月21日	湘南ベルマーレ SANNOスペシャルデー開催
10月	サッカー強化・人材育成プロジェクト開始
10月	湘南キャンパス第1・第2グラウンド改修
2007年	
1月	横浜ベイスターズと提携
2月1日	サッカー部監督に坂下博之氏が就任
4月	情報マネジメント学部にスポーツマネジメントコースを開設
4月	横浜ベイスターズとの共同授業『スポーツ企画プロジェクト』開講
6月27日	湘南ベルマーレ　SANNOスペシャルデー開催
8月14日	湘南シーレックス　産業能率大学 スペシャルゲーム開催
10月	スポーツマネジメント研究所設置
10月	女子ビーチバレー部発足川合庶氏がヘッドコーチ就任
12月16日	湘南キャンパスにビーチバレーコート竣工
2008年	
1月	湘南ベルマーレ・沖縄キャンプにて選手・コーチ陣を対象とするキャリア支援プログラムを実施
4月7日	ビーチバレーコート開設記念式典開催
5月	産業能率大学collaboration with 湘南ベルマーレ　スポーツ教室スタート
6月25日	湘南ベルマーレ　SANNOスペシャルデー開催
8月30日	湘南シーレックス　産業能率大学 スペシャルゲーム開催
11月	サッカー部 関東2部昇格への初挑戦
11月20日	東京アパッチ　産業能率大学スペシャルゲーム開催
2009年	
6月21日	SANNOスペシャルデー開催
8月	第21回全国ビーチバレー　大学男女選手権大会で準優勝（溝江/大原）
8月18日	湘南シーレックス　産業能率大学 スペシャルゲーム開催
10月18日	神奈川県大学　サッカー秋季リーグ出場
11月14日	ビーチバレーフェスタ2009開催
2010年	
5月	女子ビーチバレー部（溝江/石田）平成22年度　日本バレーボール協会ビーチバレー強化委員会強化指定選手に選出
5月16日	湘南ベルマーレ　SANNOサンクスデー開催
8月	第22回全国ビーチバレー大学男女選手権大会にて準優勝（大原/中村）
10月16日	ビーチバレーフェスタ2010開催
11月	女子ビーチバレー部　第16回アジアオリンピック評議会アジア競技大会出場（溝江）

11月	サッカー部　関東大学サッカー大会出場
2011年	
5月29日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
7月	女子ビーチバレー部関東大学ビーチバレー選手権大会で優勝（小林/石田）
8月	女子ビーチバレー部　第26回ユニバーシアード競技大会出場
8月	女子ビーチバレー部　FIVB ビーチバレージュニア世界選手権出場（石田）
9月11日	横浜ベイスターズ　SANNOスペシャルゲーム2011開催
10月15日	ビーチバレーフェスタ2011開催
11月	サッカー部　関東大学サッカー大会出場
12月18日	ビーチバレーSANNOオープン2011開催
2012年	
6月9日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
8月12日	女子ビーチバレー部　全国ビーチバレー大学男女選手権大会で初優勝（中村/石田）
9月29日	第21回よこすかカレーゲーム・産業能率大学スペシャルゲーム2012開催
10月20日	SANNO CUP 2012開催
11月	サッカー部　関東大学サッカー大会出場
11月30日	女子ビーチバレー部第2回アジア大学ビーチバレー選手権大会（溝江/石田）
2013年	
1月26日	横浜ビー・コルセアーズ　産業能率大学スペシャルゲーム
4月	サッカー部監督に加藤望氏が就任
5月25日	湘南ベルマーレ　産業能率大学 スペシャルデー開催
8月11日	女子ビーチバレー部　全日本ビーチバレー準優勝（清水 / 中丸）大学男女選手権大会
8月27日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2013開催
10月13日	SANNO CUP 2013開催
10月21日	ビーチバレーSANNOオープン2013開催
11月24日	サッカー部　関東リーグ2部昇格！
2014年	
3月21日	サッカー部 越智選手がU-19 日本代表候補選手に選出
5月31日	湘南ベルマーレ　産業能率大学 スペシャルデー開催
6月15日	2014FIFAワールドカップ　ブラジル大会パブリックビューイング開催
8月9日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2014開催
8月10日	全日本ビーチバレー　大学男女選手権大会優勝（沢/足立）
9月21日	第3回SANNOオープン開催
10月18日	SANNO CUP 2014「砂にとびこめ！未来をひらけ！」開催
11月9日	Sports Policy for Japan 2014にて　小野田ゼミが優秀賞受賞
11月15日	サッカー部関東リーグ2部残留決定
2015年	
5月25日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
6月28日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2015「SHONAN COOL FES」開催
8月9日	ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2015優勝（鈴木/石坪）
10月18日	SANNO CUP 2015「思いを伝えあう」開催
10月25日	湘南ベルマーレ　産業能率大学×自由が丘スペシャルデー　開催
11月15日	サッカー部神奈川県リーグから再スタートへ
12月5日	第4回ビーチバレーボールSANNOオープン開催
12月25日	横浜ビー・コルセアーズ　産業能率大学スペシャルゲーム
2016年	
4月23日	第 40 回 総理大臣杯 全日本大学サッカートーナメント 神奈川県予選　優勝

5月21日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー2016　開催
7月13日	第8回世界大学ビーチバレーボール選手権大会出場（石坪/鈴木）
7月28日	第27回全日本ビーチバレー女子選手権大会5名出場
8月3日	横浜 DeNA ベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム 2016「おいでよ！パレスタ☆ガーデ」開催
10月15日	サッカー部　神奈川県リーグを全勝にて優勝
10月16日	SANNO CUP 2016「笑顔の花を咲かせよう！」開催
12月4日	湘南国際マラソンのボランティアに本学学生が約 70 名が参加
12月10日	横浜ビー・コルセアーズ　産業能率大学スペシャルゲーム開催
2017年	
4月22日	サッカー部　総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント　神奈川県予選　準優勝
5月27日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
5月27日	バレーボール部　28季ぶり関東2部リーグ復帰
6月17日	サッカー部　神奈川県大学サッカーリーグ・春季リーグ　優勝
7月2日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2017「七フェスタ（TANAFESTA）」 開催
7月9日	第24回関東大学ビーチバレーボール選手権大会　9連覇
8月8日	女子ビーチバレー部　国際バレーボール連盟主催ビーチバレーボールU-21世界選手権大会 2017出場（小久保）
8月17日	女子ビーチバレー部　第29回全日本ビーチバレー大学男女選手権大会　4連覇
10月14日	サッカー部　秋季リーグ　準優勝
10月29日	SANNO CUP 2017「その一瞬にすべてをかけろ」開催
12月2日	横浜ビー・コルセアーズ　産業能率大学スペシャルゲームを開催
12月3日	湘南国際マラソン大会に本学学生がスポーツボランティアスタッフとして参加
12月21日	第36回大山登攀競技大会を開催
2018年	
5月19日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
7月7日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2018「SHONAN THEBOON（しょうなんザブーン）」開催
7月8日	ビーチバレーボール世界大学選手権大会　14位 石坪/柴（21ヶ国32チーム出場）
7月14日	ビーチバレーボールNEXT2018　第1回全日本ビーチバレーボールU23男女選抜優勝大会　優勝（若井/山田）
7月15日	第25回ビーチバレーボール関東大学選手権大会本学の10連覇を達成
8月7日	第30回全日本ビーチバレーボール　大学選手権大会　準優勝（若井/山田）
8月16日	第29回全日本ビーチバレー女子選手権大会に4人の部員が出場
10月20日	SANNO CUP 2018 「やってみなきゃはじまらない」開催
11月3日	横浜ビー・コルセアーズ　産業能率大学スペシャルゲーム　開催
11月17日	第51回関東大学サッカー大会　昇格決定戦に勝利
12月11日	関東大学サッカーリーグ2部　昇格祝勝会を開催
12月20日	第37回大山登攀競技大会を開催
2019年	
2月12日	サッカー部2018年度プロ入団会見を実施
6月 18日-23日	女子ビーチバレー部　FIVBビーチバレーボールU-21世界選手権大会日本代表出場（オト/永鳥）
6月30日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
7月 6日-7日	女子ビーチバレー部　第26回関東大学ビーチバレーボール選手権大会　優勝　（奥野/山田）
7月7日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2019「SHONAN De SPINNER」開催
7月 20日-21日	女子ビーチバレー部　ビーチバレーボールNEXT2019　第2回全日本ビーチバレーボールU-23男女選抜優勝大会　優勝（奥野/山田）
8月 6日-8日	女子ビーチバレー部　第31回全日本ビーチバレーボール大学選手権大会 3位入賞　（奥野/山田）
10月26日	SANNO CUP 2019「仲間を信じて突き進め！」開催
11月17日	横浜ビー・コルセアーズ　スペシャルゲーム
11月23日	サッカー部　関東大学サッカーリーグ2部に復帰を12チーム中6位で残留

12月19日	第38回大山登攀競技大会 開催
2020年	
1月28日	サッカー部　プロ入団発表
8月7日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2020「ぴかぴかYOKOSUKA大作戦」開催
9月 5日-6日	女子ビーチバレー部　第32回全日本ビーチバレーボール大学選手権大会　優勝（山田/オト）、4位（伊藤/野口）
10月31日	SANNO CUP 2020「オンラインキッズビーチ」開催
12月19日	サッカー部　関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中4位の創部史上最高成績で残留
12月6日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
2021年	
1月26日	サッカー部　オンラインで入団発表
7月10日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2021「湘南ハロハロ」開催
7月 15日-16日	女子ビーチバレー部　第33回全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会　2連覇（山田/オト）、3位（伊藤/野口）
7月 17日-18日	第3回全日本ビーチバレーボールU-23男女選抜優勝大会　1位（伊藤/野口）　3位（山田/オト）
7月25日	サッカー部　アミノバイタルカップ2021第10回関東大学サッカートーナメント大会　初優勝
9月1日	サッカー部　2021年度 第45回 総理大臣杯　全日本大学サッカートーナメント大会　初出場（ベスト8）
10月16日	SANNO CUP 2021「たくさんのありがとうを繋いで…」開催
11月27日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
11月29日	女子ビーチバレー部主催　第9回ビーチバレーボールSANNOオープン開催
12月19日	サッカー部　第95回関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中9位で残留
2022年	
1月27日	サッカー部　オンラインで入団発表
7月9日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2022「湘南Spark」開催
8月 9日-11日	女子ビーチバレー部　アクティオ杯 ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2022/全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会　優勝（伊藤/野口）
10月15日	SANNO CUP 2022「今ここにしかない瞬間（とき）を大切に」開催
10月29日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
12月3日	女子ビーチバレー部主催　第10回ビーチバレーボールSANNOオープン開催
2023年	
6月3日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
7月8日	横浜DeNAベイスターズ 産業能率大学スペシャルゲーム2023「わくわく湘南COLORフェス！」 開催
8月 8日-10日	女子ビーチバレー部　アクティオ杯 ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2023/全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会　優勝（伊藤/野口）
10月14日	SANNO CUP 2023「つなげ、未来へのトス」開催
11月18日	サッカー部　第97回関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中8位で残留
11月18日	サッカー部　第97回関東大学サッカーリーグ2部　得点ランキング1位タイ（猪狩）
12月2日	女子ビーチバレー部主催　第11回ビーチバレーボール SANNO オープン 開催
12月24日	第39回大山登攀競技大会 開催
2024年	
6月1日	湘南ベルマーレ　産業能率大学スペシャルデー開催
6月26日	サッカー部　J2ジェフユナイテッド市原・千葉　加入内定者会見（猪狩）
7月9日	横浜DeNAベイスターズ　産業能率大学スペシャルゲーム2024 「わっしょい！ 湘南 あお祭り」
8月 6日-8日	女子ビーチバレー部　アクティオ杯 ビーチバレーボール・ジャパン・カレッジ2024/全日本ビーチバレーボール大学男女選手権大会　準優勝（栗沢/笹渡）
10月12日	SANNO CUP 2024 開催
11月16日	サッカー部　第98回関東大学サッカーリーグ2部を12チーム中8位で残留
11月22日	サッカー部　J1FC町田ゼルビア 加入内定者会見（カウンゼン・マラ）
11月23日	サッカー部　第22回インディペンデンスリーグ全日本大学サッカーフェスティバル　準優勝
12月7日	女子ビーチバレー部主催　第12回ビーチバレーボールSANNOオープン開催
12月23日	第40回大山登攀競技大会 開催

SANNO SPORTS MANAGEMENT

Vol.17

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.17
2025年（令和7年）5月発行

＜編集 / 発行＞
産業能率大学　スポーツマネジメント研究所
〒259-1197　神奈川県伊勢原市上粕屋 1573
TEL:0463（92）2211

©The SANNO Institute of Management. All rights reserved.

SANNO SPORTS MANAGEMENT Vol.17 2025（令和 7 年）5 月発行
編集 / 発行：産業能率大学　スポーツマネジメント研究所・〒259-1197　神奈川県伊勢原市上粕屋 1573・電話　0463（92）2211

SANNO SPORTS MANAGEMENT

SPORTS MANAGEMENT RESEARCH CENTER, SANNO UNIVERSITY, JAPAN

Vol. 17